

第4章 迷入陥穽漁法の起源と展開 ―スダテの大型化と潮流の影響をめぐって―

安室 知
(神奈川大学)

はじめに

歴史的に見て日本においてもっとも大型化した漁法は定置型迷入陥穽漁法である。その基本的形状は、水界に簀を張り巡らせて迷路状の誘導路を作り、魚を捕魚部へと導くものである。浅く平らな水界が広がる場所では、より多くの魚を誘い込むように、誘導部が複雑化・大型化しやすい。そのため、その特異な景観は人の目を引き、生産量の多さも相まって、中世からさまざまな文献に取り上げられている。

この漁法は内水面を中心に全国に分布し、琵琶湖（滋賀県）や三方五湖（福井県）ではエリ、涸沼（茨城県）ではスマキ、霞ヶ浦（茨城県）や猪苗代湖（福島県）ではスダテ、印旛沼（千葉県）ではグレ、木崎湖（長野県）ではガンゴジなど、さまざまな呼称を持つ。また、松島湾（宮城県）や東京湾（千葉県）といった浅海にもその分布は及ぶ。

定置型迷入陥穽漁法の場合、学術上の一般名称としてはエリ（魩）が用いられることが多い。しかし、その名称を用いるのは琵琶湖など近畿地方に限られている。にもかかわらず一般名称とされてきたのは、都に近いという立地上の特性から、詩歌や古文獻に取り上げられることが多く、したがって他地域の定置型迷入陥穽漁法に比べて研究の蓄積が厚いためである。

そこで、本稿ではエリよりも広範囲に分布し、かつ簀を張り巡らせるという建造上の特徴を示している点を評価して、定置型迷入陥穽漁法の一般名称をスダテとし、漁具名にはスダテ型漁具の用語を用いることとする。なお、近代以降、海域において急速に普及する定置網については、スダテと同様の原理ではあるが、本稿では検討対象からは除外する。

『明治前日本漁業技術史』（日本学士院、1982）では、スダテ型漁具について「魩」と記述し、「主として、止水区域の比較的浅い所に、木竹及至簀籠を建て廻し、迂余曲折頗る複雑なる迷路を作り、而も之は整然と形状を保ち、魚族が不知不識の内に迷入せる時最奥の狭隘な壺に集まるを捕へるを迷入陥穽漁具と言ひ、エリ・スダテ・ハゼ等之に属する。右は定置漁具であり、形状も自由に変形し得ざるにより当初設計の際遺漏なきを期す要がある。魚溜に陥た魚は、釣引具やタモ網等で採捕される。故にエリ類は運用漁具ではない。」と説明する。

しかし、この説明は、最終捕魚部を「壺」と表記するなど多分に琵琶湖のエリを念頭においてなされたものである。後述するように、琵琶湖のエリは先進地にみられる最も大型化・複雑化したものである。いわば全国的にみれば特殊な例である。そのため、各地に分布する原初的な（大型化・複雑化する以前の）スダテ型漁具も視野に入れると、上記の説明では必ずしも包括しきれない事例が多く出てきてしまう。

そこで、本稿では、スダテ型漁具は「水の流れおよび魚の習性を利用して魚を捕魚部まで誘導して捕獲する仕掛けをもつ定置性の漁具」という程度の定義にとどめておく。

スダテ型漁具の最も目を引く特徴はその規模にある。琵琶湖にみられた全長700間（約1300m）のエリは特別にしても、内水面でみられる漁具の中では最大規模である。おそらく定置網が普及する以前においては、

海域も含めて最大級の漁具であるといつてよい。多くの伝承地で言われていることだが、スダテは作るものではなく、建てるものである。

また、もう1つの特徴はその特異な形状にある。まさに迷路というにふさわしい複雑な構造をしたものから、誘導部をほとんど持たない単純なものまで、その迷路のパターンは数十に及ぶ。と同時に、水界に建てられる以前のスダテ型漁具は漁具としての形をなしていない。何枚もの簀と何本もの杭があるだけである。そうした簀や杭で水面に絵を描くようにスダテは建てられる。その形態は基本的に簀や杭によって規定されない。簀や杭は単なる素材にすぎない。その数量をスダテ型漁具の形態（迷路としての複雑度）に応じて増減させるだけである。絵画に喩えれば、キャンバスが水面で、筆が杭、絵の具に当たるのが簀である。

本稿では、定置型迷入陥穽漁具について、その伝承地における水域環境と漁獲原理との関わりから、漁法としての大型化・複雑化の要因を考察する。また、迷入させるための形態差を生む要因として、人文環境（とくに歴史）と自然環境の関係を明らかにする。なかでも、本稿では汽水域における潮流の影響について注目してみたい。

そうした目的から、淡水域と汽水域にみられる定置型迷入陥穽漁具の形態について比較するが、同時に同じ淡水域であっても大水界と小水界では迷入のための構造に大きな差が見られることから、やはりそれも比較の対象とした。よって、淡水域（小水界）、淡水域（大水界）、汽水域という3地域におけるスダテの比較をおこなうこととする。

具体的な調査対象として、木崎湖（長野県）のガンゴジ、琵琶湖（滋賀県）のエリ、涸沼（茨城県）のスマキを取り上げる。それぞれの詳細については、すでに報告している（安室、1989・1990・1991・1993・1994）。そのため、記述や図版において重複が見られることをあらかじめ断っておく。

1. 淡水湖（小水界）の迷入陥穽漁具 —木崎湖のガンゴジ—

（1）伝承地としての木崎湖

①木崎湖

木崎湖は長野県北西部の標高764mにある。青木湖・中綱湖と農具川で結ばれ、仁科三湖と呼ばれる。仁科三湖の中でもっとも南に位置する。地質学的には糸魚川静岡構造線上にできた断層湖であり、面積のわりに深度が大きい。面積は約1.41平方kmで、最大深度が29.5mある。冬は厳しい寒さのため全面結氷することが多い。こうした湖面の凍結がスダテ型漁具に与える影響は大きく、設置時期や対象魚といった木崎湖におけるスダテを規定するひとつの大きな要因となっている。

仁科三湖を結ぶように農具川が北から南に流れ、図1に示すように、木崎湖では農具川の流入口にあたる海ノ口に低平な沖積地が広がっている。こうした沖積地の湖岸部にはアワラ（芦原）と呼ぶヨシや水草の繁茂する低湿地が広がる。アワラの存在とガンゴジとの関わりは大きく、そこが木崎湖におけるスダテの主な分布地となる。

調査地は木崎湖の北岸にある長野県大町市海ノ口である。海ノ口は北緯36度34分にあり、北アルプスの爺ヶ岳の西麓、標高770mに位置する。長野県の中でも冬の寒さは厳しく、また積雪の多い地域となっている。

海ノ口は、農具川が作る沖積地の縁を取り巻くように帯状に伸びている戸数100戸ほどの集落である。主産業は水田稲作であるが、夏は養蚕（夏蚕）・冬は紙漉きといった商品生産もおこなわれていた。また、漁撈に

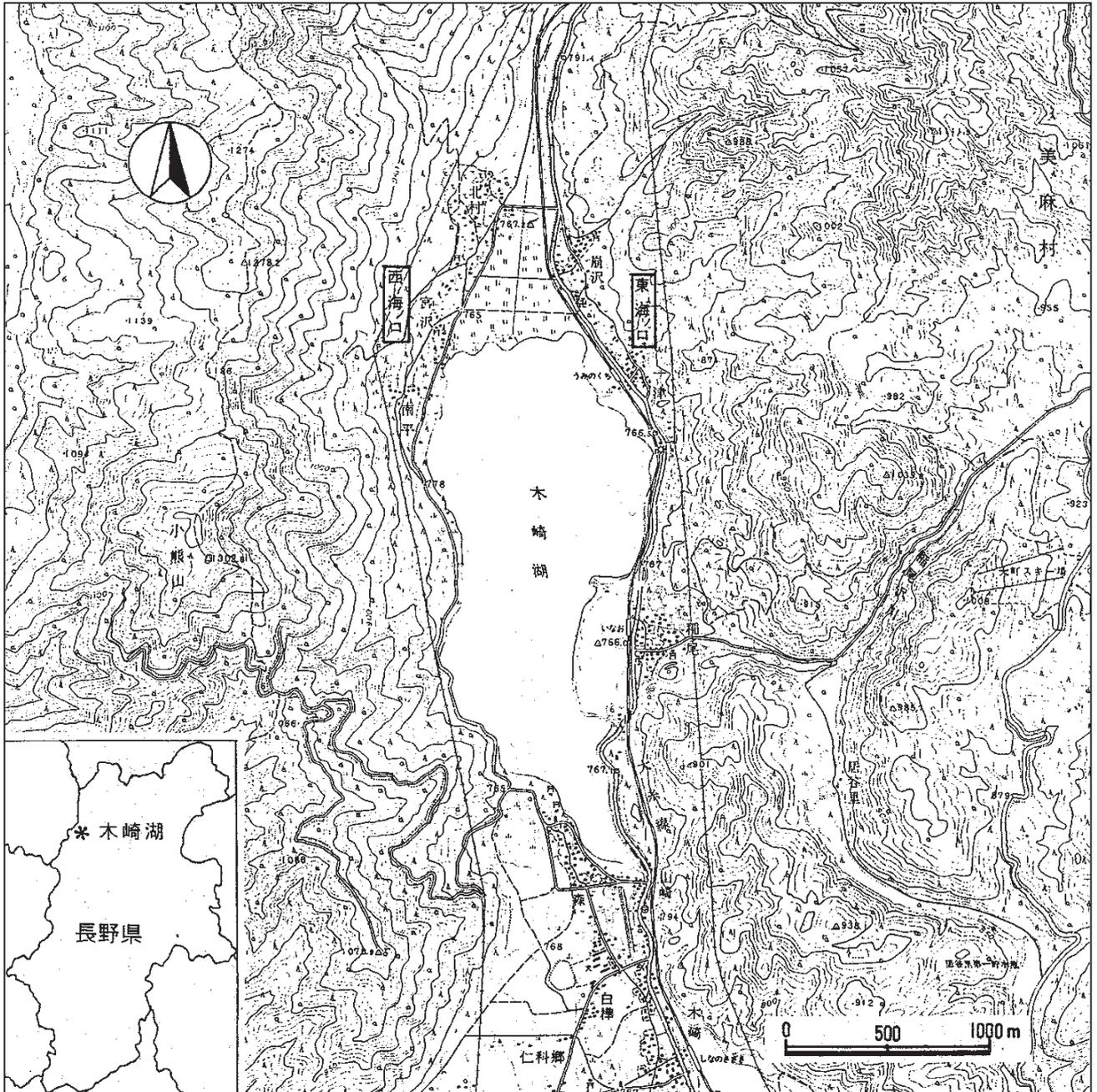


図1 長野県大町市海ノ口

より生計を立てていた家が、昭和初期には3戸ほどあったという。ただし、専業ではなく、自家消費分の農耕はそうした家でもおこなっており、耕地が少ないため商品作物の栽培ができず、その代わりに現金収入を漁により得ていたものと考えられる。

②ガンゴジ漁とは

スタテ型漁具を木崎湖ではガンゴジと呼んでいる。主として魚類の産卵習性を利用して、魚を迷い込ませる構造をもった定置性の陥穽漁具である。ヒキアミと並んで、木崎湖では最大級の漁撈具であり、1漁具当たりの漁獲量も多い。

漁獲される魚はフナとコイが中心である。最盛期には、一晩で20貫（約80kg）ものフナやコイがガンゴジに入ることもあり、水揚げした魚で舟底が見えないくらいであったという。そのほかの魚では、ウナギやナマ

ズもガンゴジに入った。とくにナマズは産卵期を迎えると大量に漁獲された。

ガンゴジの漁期は魚類の産卵期となる5～6月が中心である。産卵期を迎えて岸辺へ「寄り魚」化した魚は、夜になるとアワラのヨシ場やヒドロッタなどの低湿地で産卵をすませ、また夜明け前に湖の沖へと帰っていくとされる。そのとき沖へ戻ろうとする魚を待ち構えて迷い込ませる仕掛けがガンゴジである。5～6月の最盛期には毎晩のように大量のフナが低湿地にやってくる。たとえ家にいても、そのときたてる水音でいつフナがやってきたかを知ることができたという。そのためガンゴジを持っている家ではオトシ（捕魚部）に入った魚を掻き取り行くのは朝一番の仕事となる。

(2) ガンゴジの漁期・漁場

① 漁期

木崎湖の場合、スタテ型漁具の設置期間は湖面の結氷に大きく規定される。木崎湖は例年全面結氷するため、ガンゴジを建てるのは、木崎湖の氷が解けて湖水が平常に戻ってからである。早くても4月にならないと建てることできない。そうして本格的な漁期を迎える5月初めころ迄には建ててしまう。

一度建ててしまったガンゴジは5～6月の産卵期を中心とした漁期が終わってもそのまま放置しておく。そのため、その多くは冬の間の結氷と雪のために潰れてしまう。冬の間、木崎湖がある程度の水位を保っているときはいいが、水位が下がると凍りついたガンゴジの上に積もった雪と水面との間に空間ができ、氷と雪の重さがまともにガンゴジにかかってしまうためである。

そのため、人によっては、簀がタケでできているマス（コマス）の部分だけは雪が降る前に陸に上げて取っておく人もいた。そうすれば、その部分だけは来年も使うことができるからである。また、雪の降る前にガンゴジの廻りのヨシを刈り払って少しでも氷と雪の影響を少なくしようとする人もあった。こうして管理よくすれば、3～5年くらいは補修しながら同じガンゴジを使うことができたという。

また、材料によってもガンゴジの耐用年数は異なる。材料にタケを使った場合に比べると、アワラに自生するヨシや麻柄（麻糸の原料となるアサの表皮を掻き取ったあとに残る茎の部分）を用いて建てたものは弱かった。麻柄やヨシはタケに比べると耐久性が格段に劣るからである。また、タケは海ノ口の人々にとっては購入に頼らざるをえないものであったため大切に扱われたのに対して、ほとんどただ同然で入手できたヨシや麻柄は、漁期後わざわざ水から上げて簀を編み直したりするよりも毎年新しくした方が合理的であった。

② 漁場

ガンゴジの適地は、岸から湖にかけてなだらかに傾斜し、岸辺にはヨシ場が広がるような地形のところである。そのため木崎湖では、ガンゴジは農具川の注ぎ口に当る海ノ口と、その反対側の農具川の出口に当る山崎にほぼ集中していた。その中でもとくに海ノ口には農具川が造る低平な沖積地があり、そこはヨシ場が広がっていた。海ノ口と山崎以外は湖岸からすぐに水位が深くなっていてガンゴジの適地はほとんどない。1986年現在、海ノ口に存在するガンゴジは、図2に示したとおり、海ノ口に4基（うち3基は85年以前に造られたもので放棄されているもの）と山崎に1基ある



図2 ガンゴジの分布—1986年—

にすぎない。

ガンゴジに用いる簀の丈は標準で6尺（約1.8m）とされる。これは木崎湖の場合、自生するヨシの丈とほぼ同じで、ヨシを用いてガンゴジを建てる場合の限界と一致する。ヨシを簀の材料とする限り、6尺を超えた水深の所にはガンゴジは建てられなかったといえる。しかも簀は立てたときに水上に1尺5寸から2尺ほど出ていなくてはならないため、ガンゴジのほとんどは水深が4尺以下のところに建てられていた。つまり、木崎湖のガンゴジはヨシ場を超えて、その先に広がる湖面には行くことができなかったのである。

（3）ガンゴジの構造と規模

①構造

ガンゴジには他の漁具にない特徴がある。それはガンゴジだけでなくスタテ型漁具全体に共通するものである。それは、ガンゴジは湖上に建てられるまで漁具としての形をなさないことにある。木崎湖で用いる他の漁具たとえば刺網やロウヤ（ウケ）などは、湖に仕掛けられているときも納屋に仕舞っておくときも、基本的には漁具としての形をなしているのに対して、ガンゴジは漁期以外の時期つまり陸上にあるときにはタケないしヨシ製の簀とスギの丸太があるのみである。

木崎湖にみられるガンゴジには、図3に示したように、大きくわけて3つの型がある。

まず第一に上げられるのが木崎湖ではもっとも多くみられるタイプである。これをタイプAとする。その特徴は、ガンゴジに入った魚が、図4に示すように、オオマス→ニノキド→コマスと行きつ戻りつのジグザグの動きを2度繰り返して最後に捕魚部であるオトシに至るもので、木崎湖ではもっとも複雑な構造をした型である。

そして、もうひとつの型が、魚が直線的な動きで最後の捕魚部にまで至るものである。構造としては、図5に示すようにソデの部分が集魚装置の役目をはたし、魚が大きな空間（オオマス）からより小さな空間（マス）へと順に移動しながら最後にもっとも小さな空間（オトシ）へと至る。これをタイプBとすると、タイプAに比較して閉じた空間がひとつ少なく、構造は単純化している。

そうしたガンゴジのタイプA・Bに対して、もうひとつのタイプはとくにセリコミの名称で呼ばれるものである。タイプCとする。しかし、人によってはこれを単にタイプBの単純形と考えている人もいる。よって、このタイプCは、形態的にはソデをもったロウヤ（箱形のウケ）に近く、ガンゴジとロウヤとの中間型であるとも言える。

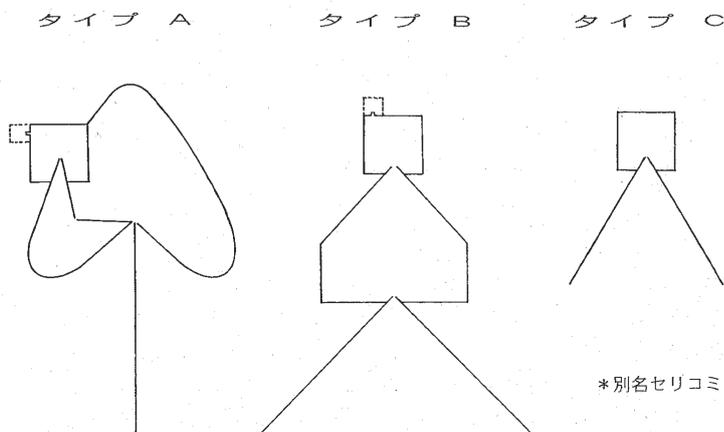


図3 ガンゴジの型

この分類に従って、仁科三湖におけるガンゴジの分布を見てみると、湖ごとに特徴があることがわかる。つまり、木崎湖にはジグザグ型と直線型の両方のタイプ（つまりタイプA・B・Cの3つの型）が見られるのに対して、中綱湖や青木湖には直線型（つまりタイプB・Cの2つの型）しか見られない。中綱湖や青木湖にはガンゴジの中でもっとも複雑な型が欠けていたといえる。

基本的に木崎湖のガンゴジの場合、捕

魚部のオトシが左右対称に造られることはなく、また複数の段を持つものもない。したがってガンゴジは全体形としても基本的に一施設あたり一捕魚装置しかない。それはタイプAのように構造の複雑なガンゴジについても単純なセリコミについても同様である。

②規模

ガンゴジの全体及び各部位の大きさについては図6に示したとおりである。ガンゴジの場合、漁具の全長はミチズの長さに大きく左右される。そしてそれは、ガンゴジが設置される湖岸環境により変化する。ヨシ簀で作られるミチズは、ヨシ場の先つまりヨシの丈よりも深いところに出ることはできない。そのため、結果的にミチズの長さはヨシ場の幅（岸辺の陸地から水面まで）と同じになるのである。

そのため、ガンゴジは、図7のあるように、岸から沖にミチズを延ばし、ヨシが尽きたところにオオマスやニノキドといった本体が建てられることになる。そのときヨシ場から完全にガンゴジ本体を湖上に突き出してしまわずに、ニノキドやオオマスの一部をヨシ場に掛けて建てなくてはならないとされる。

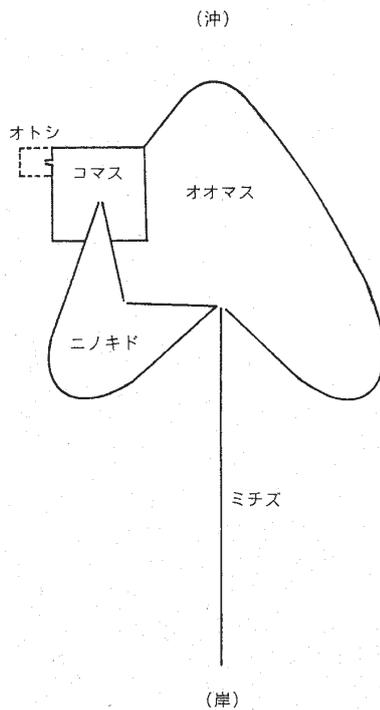


図4 ガンゴジの構造—タイプA—

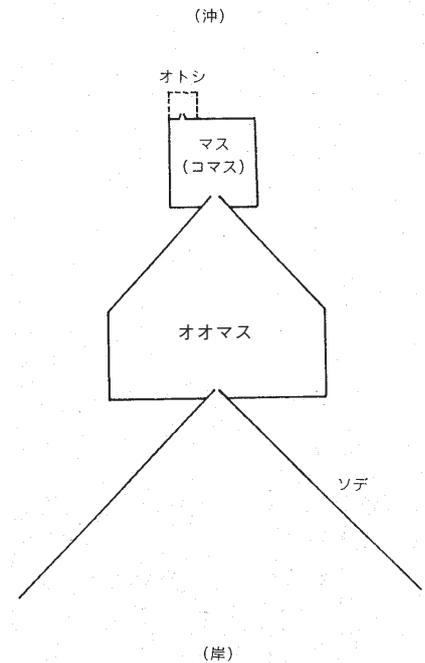


図5 ガンゴジの構造—タイプB—

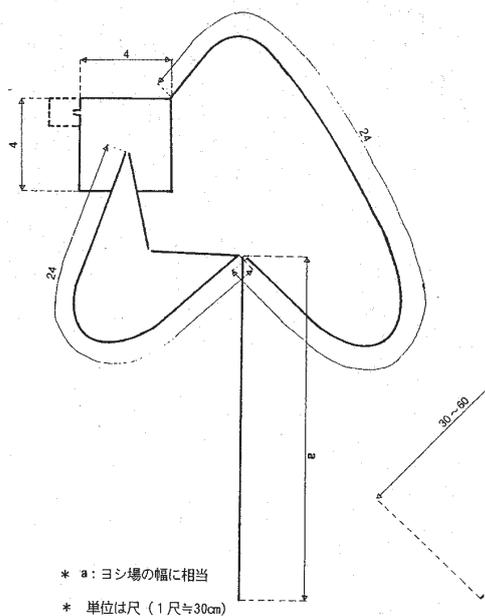


図6 ガンゴジの規模—タイプA—

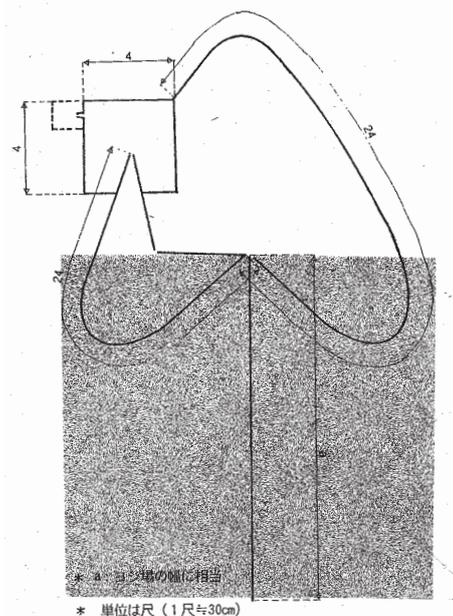


図7 ガンゴジの仕掛方—ヨシバとの関係—

2. 淡水湖（大水界）の迷入陥穽漁具 —琵琶湖のエリ—

(1) 伝承地としての琵琶湖

①琵琶湖

琵琶湖は面積 670 平方km、湖周 240kmに達する日本最大の湖で、滋賀県の面積の6分の1を占める。最大水深は 100m を超えており、海洋と同じように、弧を描くように一定の方向に流れるシオ（湖流）が存在する。こうしたシオの存在がエリの大型化と大きく関わってくる（後述）。

琵琶湖のもっともくびれたところに琵琶湖大橋が掛けられるが、その北側部分を北湖、南側部分を南湖とよぶ。面積的には北湖が圧倒的に大きい。琵琶湖の周囲は、大きく湖南・湖東・湖北・湖西の4地区に区分される。

古代湖として知られる琵琶湖には、ビワコオオナマズやホンモロコ、ワタカ、ニゴロブナといった多くの固有種がいる。また、琵琶湖で採取された稚アユは日本各地の放流用アユに用いられる。そうした魚の多くがエリ漁の対象となる。

本論で主たる調査地としたのが、滋賀県守山市木浜^{もりやま このはま}である（図8）。木浜は南湖と北湖とのちょうど境目となる地域の東岸に立地する戸数 300 戸ほどの集落である。木浜一帯は野洲川などの沖積地からなる湖東平野で、滋賀県でも有数の米作地帯を形成している。

木浜も耕地のほとんどが水田である。農業構造改善事業（昭和 38 年～ 47 年）による水田の基盤整備がなされる以前には、木浜の耕地には4つの内湖があり、その内湖を結ぶように堀が網目状に張りめぐらされていた。

そのため、木浜の人々は稲作を主生業としながら、オカズトリと称する漁撈をごく日常のおこなって生活してきた。つまり、木浜は水田稲作村落としてはもっとも生業複合度の高い生計維持システムを有していたといえる。そし

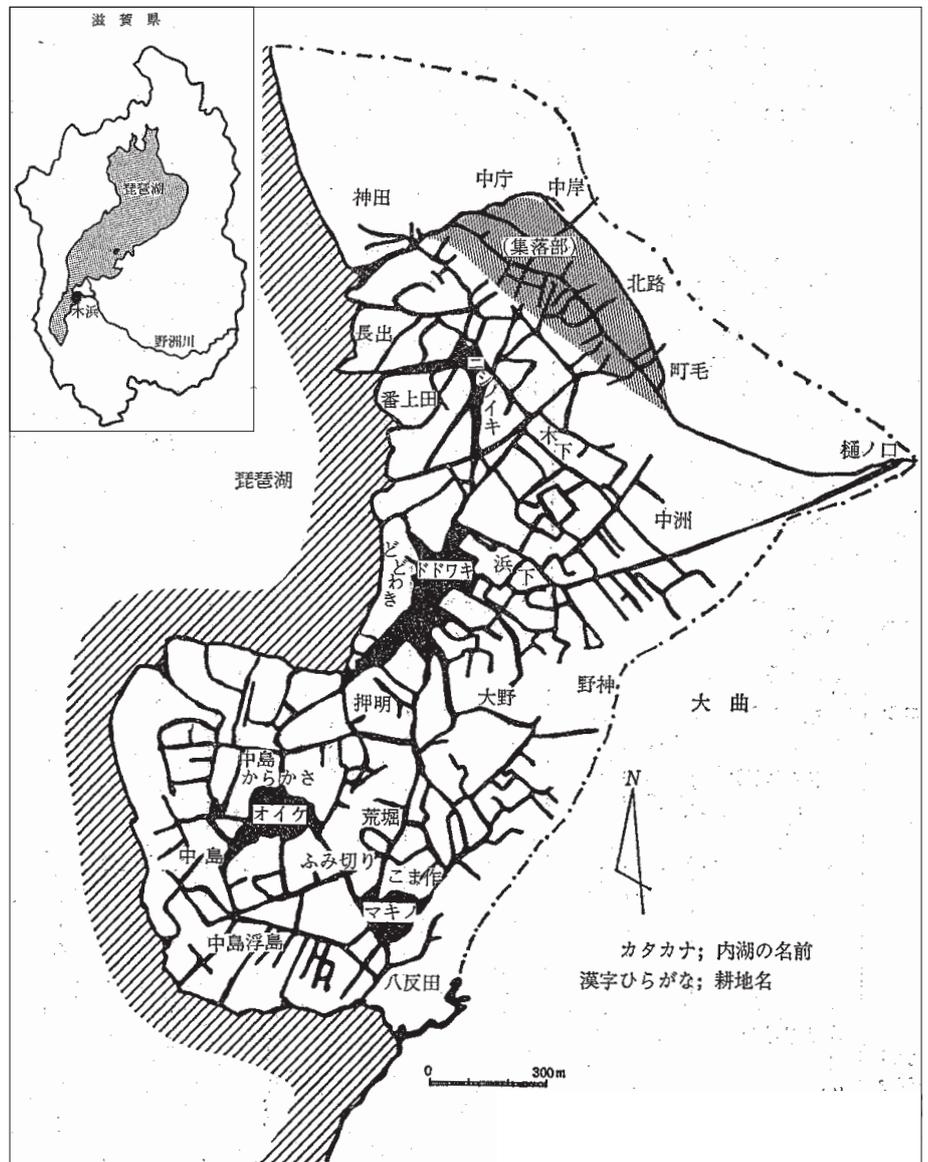


図8 滋賀県守山市木浜
—『内湖と河川の漁法』（滋賀県、1981）より修正転載—

て、本稿でもっとも重視するのは、木浜が琵琶湖ではエリと呼ぶスダテ型漁法の「親郷」として伝承されていることである。そのため、かつては木浜の人が魼師（エリを建造する専門技術者）となって琵琶湖全域のエリ建造を請け負っていた。

②エリとは

琵琶湖ではスダテ型漁具をエリと呼ぶ。魚が自然と入り込むことから「魼」の字を当てて、これは国字である。エリを建造することをエリダテ（魼建て）といい、それをおこなうのが魼師である。その中でも、エリの建造をオヤカタ（親方）と呼ぶ依頼者から請け負い、エリダテの一切を指揮するのがトウリョウ（頭領）である。エリは琵琶湖各地に300ヶ所あまりも建てられているが、かつてトウリョウの多くは木浜や近江八幡にしか存在しなかった。そのため木浜は「エリの親郷」とされてきた。昭和初期には約20人のトウリョウが木浜には存在したとされる。

また、漁業協同組合でエリを管理するようになる以前（太平洋戦争前）は、自治会で管理運営する地下エリを除くと、エリの建造を依頼するオヤマタは、ウエ・タツベといった小型の定置漁具を用いて漁をおこなう零細漁民とは区別されていた。それはエリの建造には大きな資本が必要だからである。零細漁民にその資力はなく、オヤカタの多くは水産加工場や大きな料理屋を経営する漁業資本家であった。

木浜のトウリョウはエリを使って漁をすることはない。他者認識においてまた自己認識のうえでも彼らは稲作農家である。当然、トウリョウはオヤカタになることはなく、零細漁民でもない。こうした木浜のトウリョウは、農閑期になると琵琶湖中いたるところにコカタ（子方:手伝い）を3・4人ずつ連れてエリダテにまわる。魼師とは、トウリョウとコカタを合わせたエリの建造に携わる人々の総称である。

エリを1か所建てるには20日から40日かかり、1人のトウリョウが一冬に建てられるエリは多くて4か所ほどであった。なお、トウリョウなど実際のエリダテをおこなうのは男性であるが、木浜の女性は冬場の賃稼ぎとしてエリの簀編みをおこなっている。簀編みは木浜村内でおこなわれており、魼師のようにエリダテ地を泊まり込みで回ることではない。

木浜近辺には昔から多くのエリが建てられており、中には全長700間に及ぶ大エリもあった。木浜にみられた大エリには、豊臣秀吉が名付けたと伝えられる茶柄杓エリなどもある。こうした大エリは日本最大規模のスダテ型漁具であり、その発達の高さを示すものである。大エリをめぐるのは対岸の集落である堅田の漁師や琵琶湖の舟運業者との確執など、文書史料に残されるできごとも多く、かつて木浜の名はエリを通して琵琶湖中に知られていた。

(2) エリの漁期と漁場

①漁期

琵琶湖全体で見ると、かつてはほぼ年間を通してエリでの漁は対象魚を変えながらおこなわれていた。しかし、実際にエリ漁ができる期間はエリダテ地により地域差が大きい。漁期はつまるところエリが湖に建てられている期間と重なる。同じ琵琶湖岸にあっても、エリが建てられる期間は最大6ヶ月も異なる。そうした差ができるのは、冬期の風の吹き方など自然条件とともに、木浜の魼師がエリダテして廻る順序など人文条件とも大きく関わっている。

主にエリダテは農閑期の冬におこなわれる。そのため、冬の風により、トウリョウのエリダテにともなう移動は規制を受けることになる。エリダテ作業は風の影響を受けやすい。そのため、風の強く吹くところ（時期）

とそうでないところ（時期）とでは必然的にエリダテの時期が異なっており、そのためエリダテに廻る順序がおのずと決まってくる。湖北では12月から2月にかけてユキオコシ（風名）とヒエオロシ（風名）が吹き荒れる。琵琶湖でも北へ行けば行くほどそうした風が吹き荒れる期間は長くなる。そのため、湖南は10月ごろからエリダテができるのに対して、湖北の長浜市やびわ町あたりでは翌年の3月から4月にならないとエリダテができない。

このように冬の風はエリダテにかかわるが、夏の風とくに台風はエリの管理維持にかかわってトウリヨウの行動を規定する。台風に見舞われ、自分の建てたエリが流されたりすると、トウリヨウはそれを修理に行かなくてはならない。冬の風は吹く時期や強さが予測されていてその対処はほぼ万全であるが、台風はそうはいかない。しかも、台風の時期はトウリヨウの本業である稲作にとっても忙しい。現在は県の規則により、8月以降はエリを建てておいてはいけないことになっているが、そうした規則ができるまでは10月ころまでエリを建てていたのが必然的に台風の被害を受けることも多かった。

エリには、簀の目（細かさ）により、ホソメ・チュウメ・アラメの3種類がある。簀の目は対応する漁獲対象により異なる。ホソメは昭和40年（1965）以降に需要が急激に増えた稚アユ（放流用のアユ）を主として取るものである。また、アラメは主として大型のフナを対象とするが、コイも入る。それに対しチュウメはザコエリとも呼ばれ、アユ・モロコ・ハス・ヒガイ・ウナギなど大型のフナやコイ以外のものを取った。稚アユが近年になってエリの対象魚となったことを考えれば、エリは本来はフナ・コイとザコを対象としたものであるとって間違いない。しかも、フナに対してその他の魚をザコと呼んで一括してしまうことから、エリ漁の対象魚としてフナの重要性を読み取ることができる。

②漁場

エリの漁場は琵琶湖全域に及ぶ。琵琶湖に隣接する内湖、流入河川の河口部、また湖岸の水田の中にもエリは建てられる。なかでも、地域的にエリが多く集中するのが、南湖周辺と北湖の南東岸である。つまり陸地側に平野が発達し、その続きで湖側が浅堆地となっているところに多くエリが見られた。また、そうした浅く広い水域には前述の700間を超えるような巨大なエリがかつて建てられていた。

網エリやプラスチック簀が登場する以前は、エリを建てるためには杭や簀の材料となるタケが必須であった。そのため、どうしてもタケの丈よりも浅いところにしか建てられなかった。タケは大きなもの（孟宗竹）でもせいぜい20メートルほどしかない。しかも杭の場合言えば、湖底に打ち込む分と湖上に出しておく分が必要のため、さらにエリを建てられるのは浅いところとなる。また、伝承ではかつてエリの簀に、タケではなく、ヨシを用いていたとされる。その場合には、ヨシは丈が最高でも5mほどしかないため、さらに浅い水域でしかエリを建てられなかったことになる。

また、深いところほど杭打ちと簀を水中に建てる技術の難易度は上がる。そのため、南湖に比べると相対的に遠浅な部分が狭い北湖ではエリは建てづらい（図9参照）。北湖の中でも、南東部は湖東平野になっており湖岸に続く浅堆地は広く、また各所に浅い内湖も存在する。エリはそうしたところに多く見られる。しかし、北湖の場合、北に行くほど湖岸から急に深くなる場所が多くなりエリを建てることのできる場は限られ、また建てられても小型のものがほとんどとなる。同じことは北湖の湖西部にもいえる。つまり琵琶湖の場合、エリは湖南と湖東により適応的な漁具であるといえる。

トウリヨウは浅いところなら技術的にはどんなに大きなエリでも建てられると豪語する。しかし、実際には船の航行や対岸から伸びるエリとの関係で、エリの延伸は制限されてきた。事実、歴史的に見ると、エリの沖

への延伸をめぐっては、たびたび争いが起きている。エリは大型化したがつゆえ社会的な規制を強く受ける漁法になったといつてよい。

琵琶湖の場合、そうした浅い岸辺はかつてはヨシ場になっていることが多く、エリはヨシ場の中から、湖との境界へ、さらにその先(沖)へと伸びていったと想定される。ハネコミと呼ばれる小型でもっとも単純な構造をしたエリが建てられるのはヨシ場の中であることは、そうした考えを支持する(後述)。

(3) エリの構造と規模

①エリの基本型

琵琶湖の場合、エリの基本的形態を決定するのは、以下の3要素であるといつてよい。a. エリの複雑度、b. ツボの数、c. ツボの位置。この3要素に注目してエリの基本形を整理したのが図10である。ただしこれはあくまで基本形のみで、これ以外にも後述するようにエリの全体形を決定する要素がいくつもあり、その組み合わせはじつに多様である。なお、テンピンのソトツボを例に取り、各部位の名称と標準的な大きさ(必要な簀の枚数)を示しておく(図11)。

a. エリの複雑度は、エリ内に入った魚が遊泳する方向を変える回数に比例する。方向を変えたびに魚はより小さな空間に入り込んでゆく。そのため、ツボと呼ぶ最終の捕魚部に至るまでの仕切られた空間の数と、魚の方向転換の回数はほぼ一致する。1度の方向転換でツボに落ちるタイプをズットイキ、3回方向転換するタイプがウチマタゲ、4回の方向転換が必要なタイプがテンピンである。閉じられた空間の数(ツボを含む)でいうと、ズットイキが2ないし3、ウチマタゲが4、テンピンが5となる。

b. ツボの数は、エリ1か統あたりの漁獲量を反映する。ツボの大きさはウチマタゲであろうとテンピンであろうと変わらない。なのでツボの数が多いほどエリ1か統あたりの漁獲量は多くなる。ツボはエリ内部において魚が最終的に行き着く先で、人が魚を掻き取る捕魚部となる。その数は2の階乗となる。具体的には2ツボ・4ツボ・8ツボの3タイプが基本となる。ただし、6ツボもテンピンとウチマタゲを組み合わせた場合にはありえる。また、エリのもとの形態と考えられるごく単純な構造のハネコミの場合にはツボは1つである。8ツボのエリが琵琶湖ではもっともツボの数が多く複雑なタイプとなる。なお、上記のツボ数はあくまでエリ

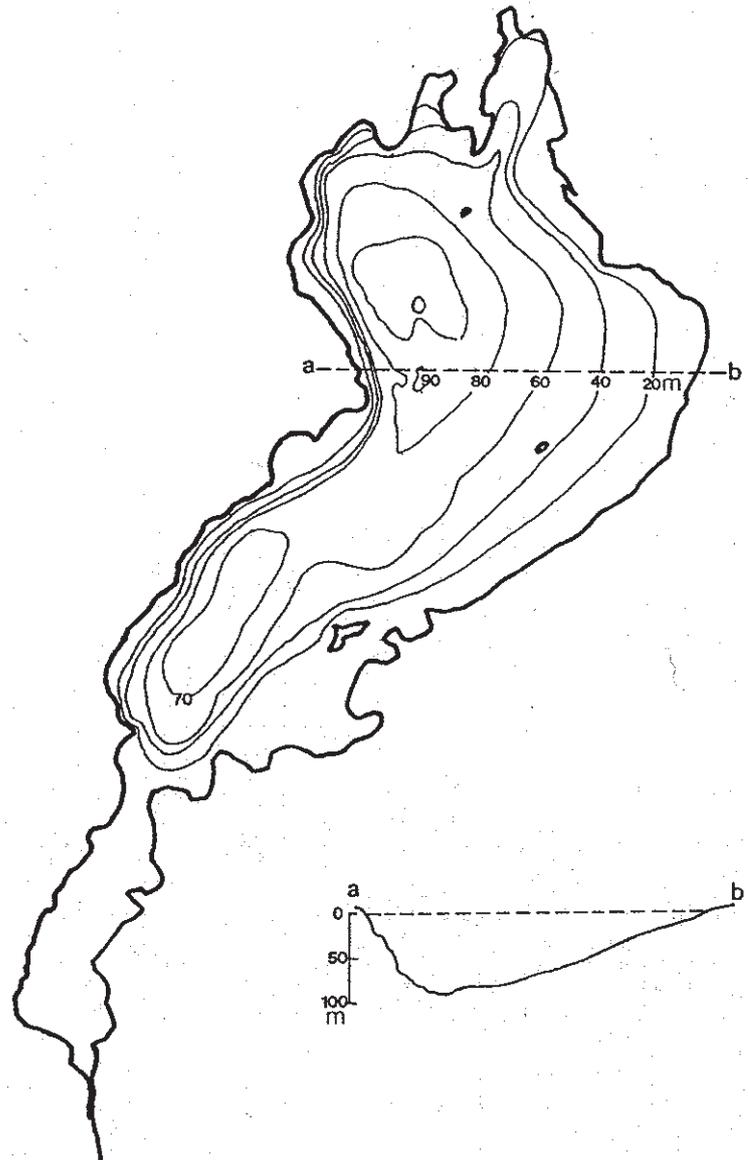


図9 琵琶湖の水深—『びわ湖の自然』(滋賀県、1973年)より—

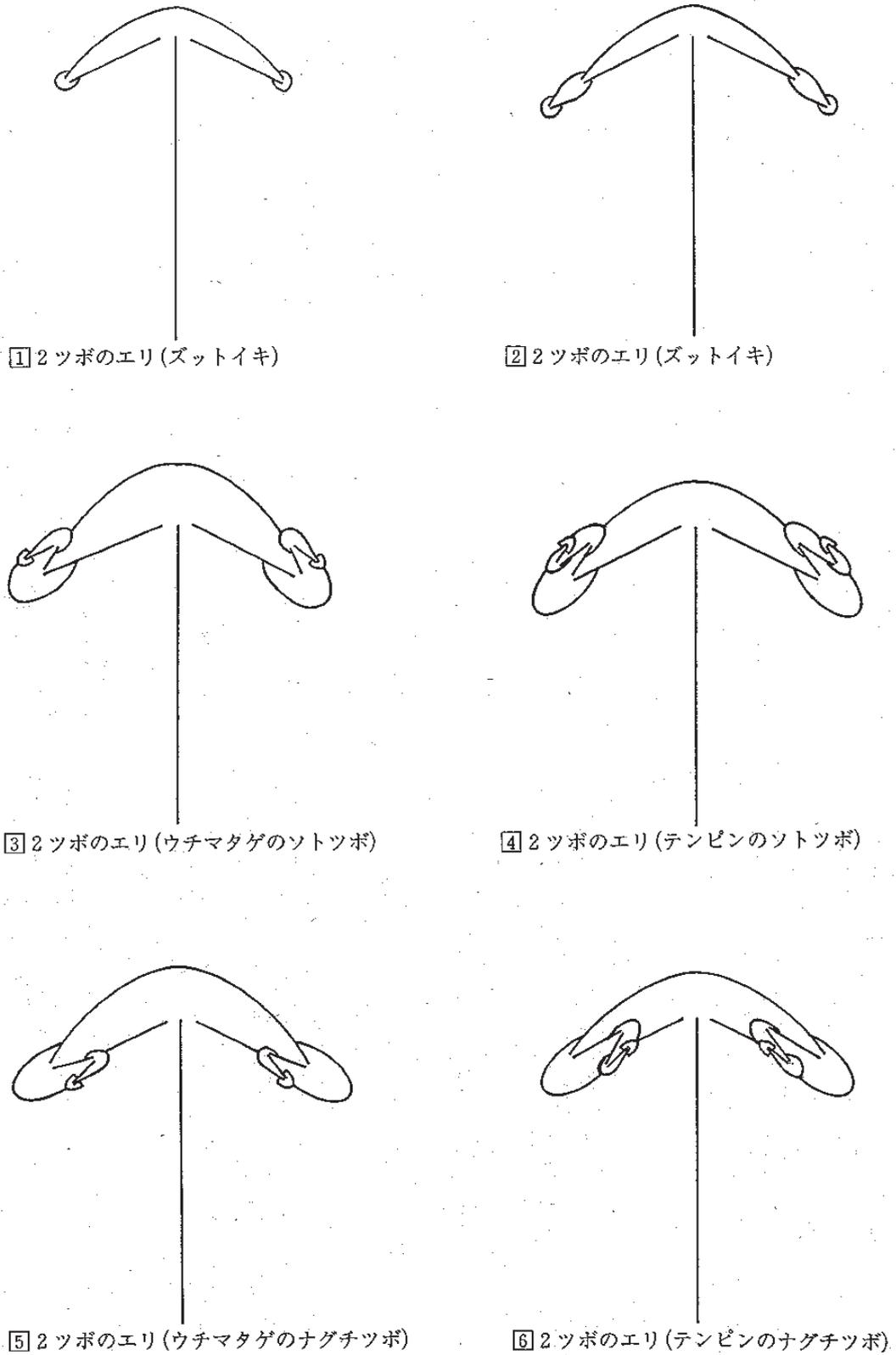
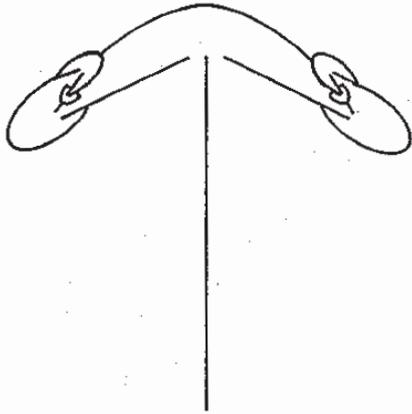
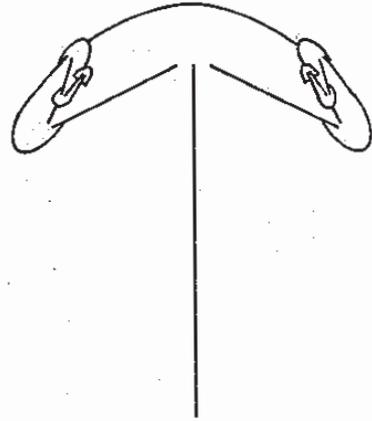


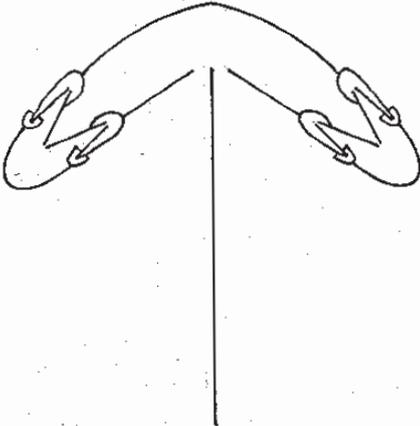
図10-1 エリの基本形(複雑度・ツボの数・ツボの位置の3要素による)



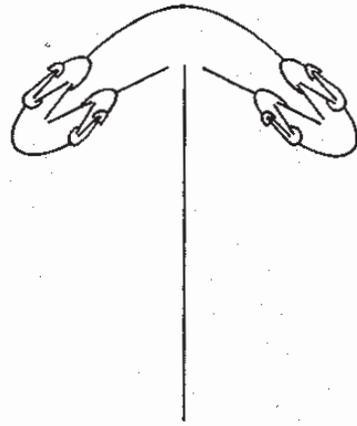
7 2ツボのエリ (ウチマタゲのナカツボ)



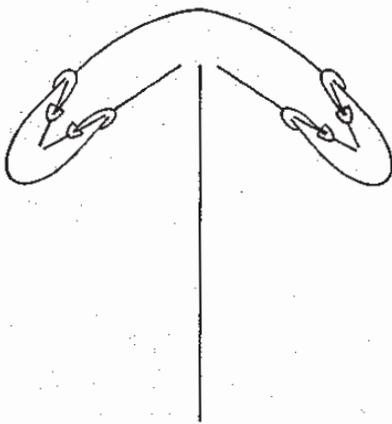
8 2ツボのエリ (テンピンのナカツボ)



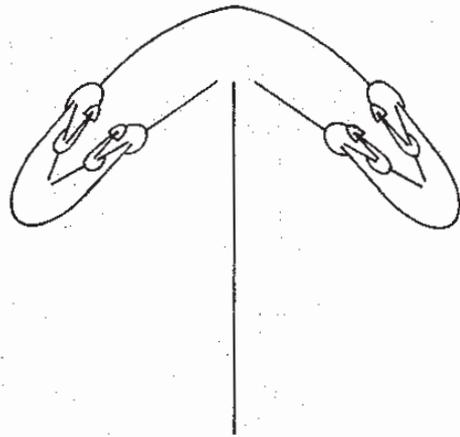
9 4ツボのエリ (ウチマタゲ)



10 4ツボのエリ (テンピン)

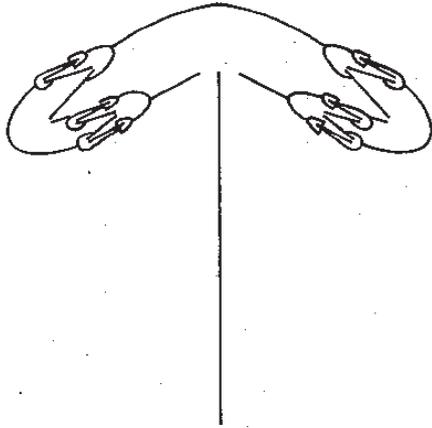


11 4ツボのエリ (ウチマタゲのナカツボ)

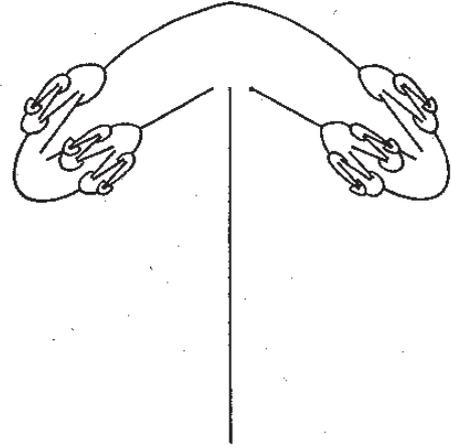


12 4ツボのエリ (テンピンのナカツボ)

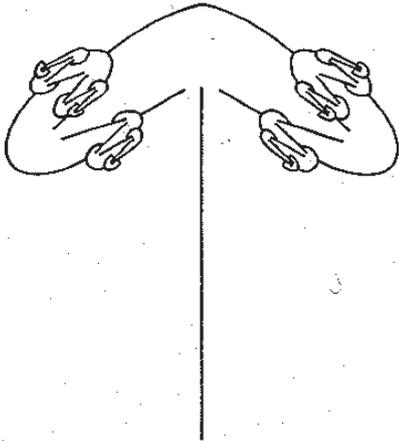
図 10-2 エリの基本形 (複雑度・ツボの数・ツボの位置の3要素による)



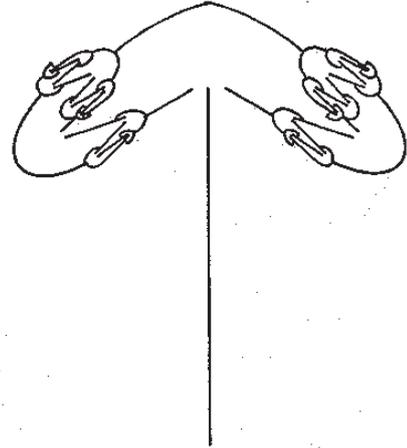
13 6ツボのエリ(ウチマタゲのダキツボ2つ)



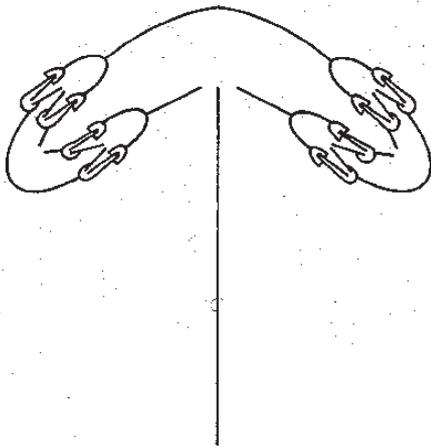
14 6ツボのエリ(テンビンのダキツボ2つ)



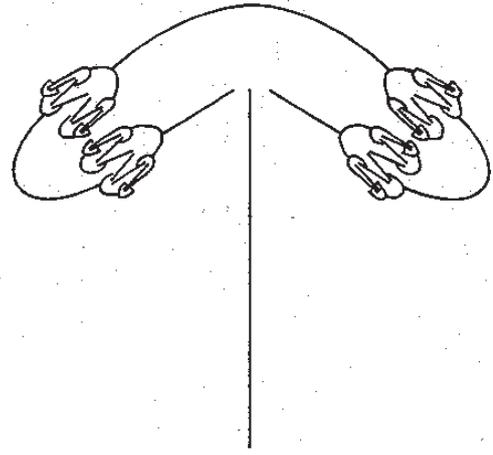
15 6ツボのエリ(テンビンのダキツボ1つ)



16 6ツボのエリ(テンピンとウチマタゲの合成)

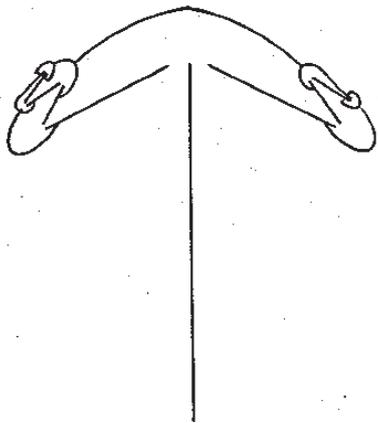


17 8ツボのエリ(ウチマタゲ)

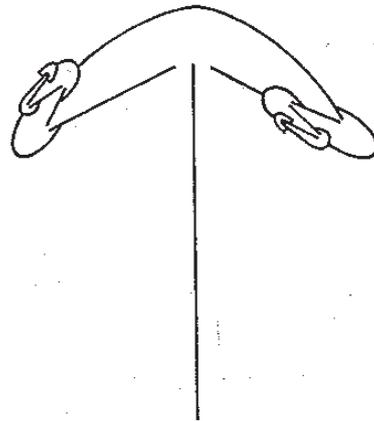


18 8ツボのエリ(テンピン)

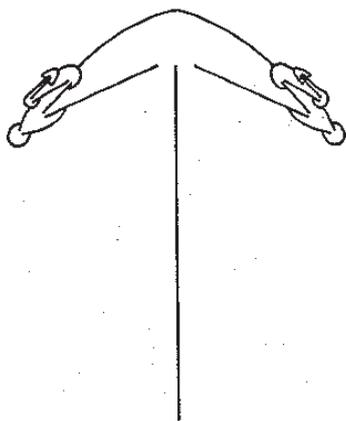
図10-3 エリの基本形(複雑度・ツボの数・ツボの位置の3要素による)



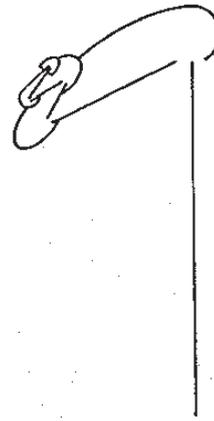
19 特殊なエリ (左テンピン・右ウチマタゲ)



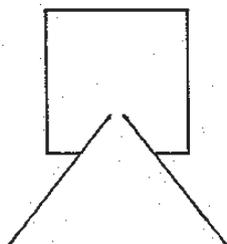
20 特殊なエリ (左ソトツボ・右ナグチツボ)



21 特殊なエリ (ズットイキとソトツボの合成)



22 特殊なエリ (左片側だけのエリ)



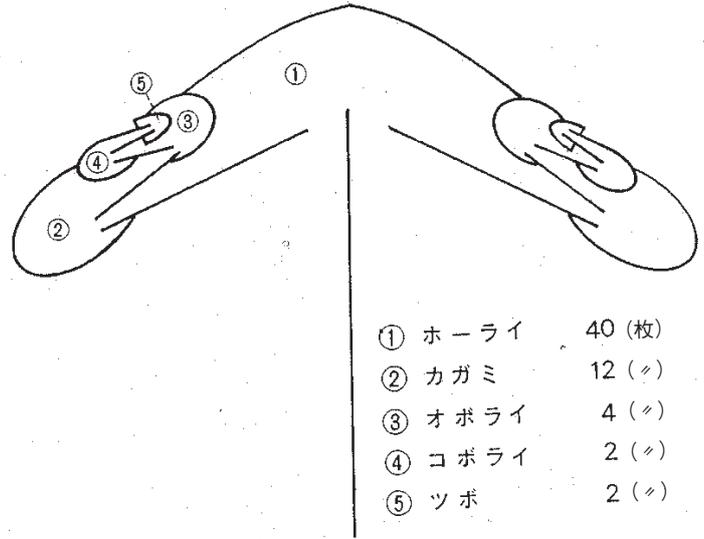
23 ハネコミ (原初的なエリ)

図 10-4 エリの基本形 (複雑度・ツボの数・ツボの位置の3要素による)

1ダンあたりのもので、ダン数が増えれば、当然そのダン数が乗された数になる。

c. ツボの位置によっても、エリの基本形は3つにタイプ分けされる。ソトツボ・ナグチツボ・ナカツボの3タイプである。エリの傘の外側にツボが付くのがソトツボ、内側（ナグチ側）に付くのがナグチツボ、エリの内部に組み込まれてしまうのがナカツボである。エリの設置場所における卓越する風によって、ソトツボかナグチツボかが決められる。それは船上での作業となるエリカキ（漁獲作業）の利便を考えてである。また、ナカツボは魚の盗難予防の意味もある。

エリの全体形を決定する要素はこの他にもいくつもあるが、それは次項で詳述することにする。ここでは上記3つの要素に限定してエリの基本形を示したにすぎない。



(数字；簀の枚数，1枚簀=5.4メートル)

図11 エリの部分名称と大きさ—空間（曲線部）—

②型と規模の決定

エリの全体形（型と規模）は主にトウリョウの判断により、エリダテ地における湖底の様子や卓越風といった自然環境を考慮して決められる。しかし、実際はオヤカタとの話し合いで決めることになる。というのは、エリを建てるには昔から莫大な費用がかかるため、その負担者であるオヤカタの資金力によって、ツボの数・ダンの数・複雑度などさまざまなことが左右されるからである。したがって、初めてエリを建てるオヤカタにはトウリョウとしても一切をまかせてもらうことになるが、何度もエリを建てているオヤカタになると、さまざまな注文をトウリョウにつけてくるようになる。

先に図10で示したのがエリの基本形であるが、これはあくまでエリの複雑度・ツボの数・ツボの位置の3つの要素に限定したときの形のバリエーションであり、実際には表1にあるようなさまざまな要素の組み合わせにより規模も含め全体形は変化する。

また、トウリョウのエリダテ技術は家伝的に継承されることが多かったため、トウリョウが建てるエリにはそれぞれ個性があった。トウリョウ同志なら一目でそのエリを建てたのが誰だかわかったという。

表1 エリの全体形決定の要素

要素	種類・名称	選択基準
① 複雑度	ズットイキ・テンピン・ウチマタゲ	漁獲量、財政状態
② ツボの位置	ソトツボ、ナグチツボ、ナカツボ	風など自然条件、盗難など人文条件
③ ツボの数	2ツボ、4ツボ、8ツボ、(6ツボ)	漁獲量、財政状態
④ ダンの数	1ダン、2ダン、3ダン、(4ダン、5ダン)	漁獲量、財政状態、自然条件、慣例
⑤ 傘の向き	一般的なもの、サカサハリ	湖底など自然条件
⑥ 傘の開き	45度、60度	湖底など自然条件、魚の生態
⑦ 簀目の細密	ホソメ、チュウメ、アラメ	対象魚種、時流
⑧ 簀の材料	タケ、プラスチック、網、(ヨシ)	対象魚種、時流
⑨ 対象魚種	フナエリ、ザコエリ	対象魚種
⑩ 仕掛場所	ハネコミ、カワエリ、ヌマエリ、一般的なもの	自然条件、慣例

さらに、同じトウリヨウの建てるエリでも場所が違えば自然条件が異なり、当然オヤカタの要求も違ってくるため、たとえ同じ型のエリを作っても全体形は違うものになる。そのほかには時の流行（対象魚の変化・エリの材料の変化など）にもエリの全体形は左右される。

こうしてみると、エリの形は無数にあるとあってよい。以下では表1に沿って、エリ全体形を決定する各要素について簡単に説明しておく。

[1] 複雑度

ズットイキ・ウチマタゲ・テンピンの3タイプが基本。

[2] ツボ（捕魚部）の位置

ソトツボ・ナグチツボ・ナカツボの3タイプが基本。

[3] ツボの数

2ツボ・4ツボ・8ツボの3タイプが基本。原初的なものに1ツボ、例外的なものに6ツボがある。

[4] ダンの数

1ダンが基本だが、2ダン・3ダンも多く見られる。近代には最大6ダン程度まで建造されていた。ダンが複数の場合、通常は沖側のものほど傘は大きく作られる。

[5] 傘の向き

傘の内側つまり魚の最初の入り口を岸に向けるタイプが基本である。例外的に傘の内側を沖に向けるタイプがあり、それをサカサハリまたはサカサガケという。

[6] 傘の開き（角度）

60度前後と45度前後の2タイプが基本。

[7] 簀の細密

簀の目の大きさにより、ホソメエリ・チョウメエリ・アラメエリの3種類が基本。

[8] 簀の材質

タケが一般的。のちにプラスチック製の簀や網エリが登場。

[9] 対象魚種

フナエリ・ザコエリの2種が基本。のちに稚アユ専用のタイプも登場。

[10] 仕掛場所

ウミ（湖）が一般的、カワエリ（川）やヌマエリ（沼）、タエリ（田）は地域が限定的。

3. 汽水湖の迷入陥穽漁具 — 涸沼のスマキー

（1）伝承地としての涸沼

① 涸沼

涸沼は茨城県の太平洋岸、そのほぼ中央に位置している（図12）。湖水面積9.35平方km、湖岸延長20km、平均水深2.1m（最大水深6.5m）の小さく浅い湖である。地質学的には、那珂川の堆積作用によりできた海跡湖とされる。

その最大の特徴は、太平洋に近く、涸沼川を介して潮の干満の影響を受けることにある。そのため、涸沼は約6時間おきに潮の流入を受け、湖は汽水となる。その結果、淡水魚だけでなく海の魚も多く、全体で50種



図12 茨城県大洗町松川・茨城町下石崎

以上もの魚類が棲息している。古くからコイ・フナ・ウナギ・スズキ・カレイ・クロダイなどの魚類のほか、シジミなど貝類の好漁場として知られる。

澗沼の中でも澗沼川の流入口に当たる地域（澗沼西部）と澗沼川の流出口に当たる地域（澗沼東部）にはヨシやモク（藻）の繁茂する浅堆地が広がっている。このうち澗沼東部は、海から潮が逆流して滞水し、土砂が十分に澗沼川に排出されずに堆積してしまうため、とくに浅く広い浅堆地になっていた。そうした浅堆地は、潮が引いたときには島のように陸地化するセガタ（瀬潟）がところどころにできる。そのため、セガタは江戸時代から近代に至るまで干拓による新田開発がおこなわれてきている。

そうした澗沼東部地区（スマキが多く分布する下石崎や松川など）に暮らす人々は、水田稲作を主に、畑作や漁撈をおこなって生活してきた。旧来からある谷津の中の水田をホンデン（本田）、近代以降にセガタを埋め立てて拓いた水田をシンデン（新田）と違って区別する。

②スマキとは

汽水湖たる澗沼に伝わる特徴的な漁法にスマキがある。タケで編んだ簀を湖上に立てめぐらせて建造する。スマキの呼称はその形態から付けられたもので、漢字を当てるなら簀巻ということになる。

スマキは、その形態からも明らかなように、定置性迷入陥穽漁法の一つで、琵琶湖のエリや木崎湖のガンゴジと同様のものである。その特徴は内水面漁撈としては最大級の規模にある。澗沼においても全長100間（180m）に及ぶものがかつて作られており、もちろん澗沼の中では最大規模の漁法である。

湖岸集落の一つ、松川（大洗町）ではスマキの起源について、江戸時代に殿様から松川 63 戸に権利が与えられたものであるという伝承がある。その事実関係は不明である。伝承の上では、スマキの歴史がもっとも古く、また今までもっとも大型（全長 100 間）のスマキが建てられたところが松川である。同時に涸沼の中で最後までスマキが残ったのも松川である。

また、涸沼のスマキの技術は、もとは仙台湾（宮城県）や北浦（茨城県）から伝わったとされる。ただし、北浦や霞ヶ浦に見られる定置性迷入陥穽漁具は、琵琶湖のエリと同様に岸辺に基点を設けて、そこから水面に傘を広げた形のいわゆる突き出し型であり、涸沼でスマキを建てていた人たちは北浦や霞ヶ浦のものとは建造の手口がまったく違うという。その違いを生み出す最大の要因が、涸沼を汽水域にしている潮の定期的な流入にある。

(2) スマキの漁期と漁場

① 漁期

涸沼では、スマキは一年中建てておくことができる。しかし、その間に保守点検のため 12 月と 4 月の 2 回、いったん簀を陸に上げて再度建て直す必要がある。なお、一時期、涸沼にニシンがやって来たときには、その漁獲時期に合わせて修理する時期を 2 月と 8 月にずらしたことがある。

建て直しときには、水中に建てた簀を一度水から上げて天日に干す。そうして簀に付着して簀目を塞いでいるフジツボなどを落とす。また、傷んだ簀は、一度解いて編み直す。そのとき、古いタケと新しいタケとを 2 対 1 の割合で交互に並べて編んでゆく。こうして簀を整えてからまたスマキを建て直す。

なかには、スマキは壊れない限り建て直したりしないという人もいるが、そうすると 1～2 年で完全にそのスマキは使い物にならなくなり、建て直しもきかなくなる。その場合は壊れるごとにスマキを新調することになる。

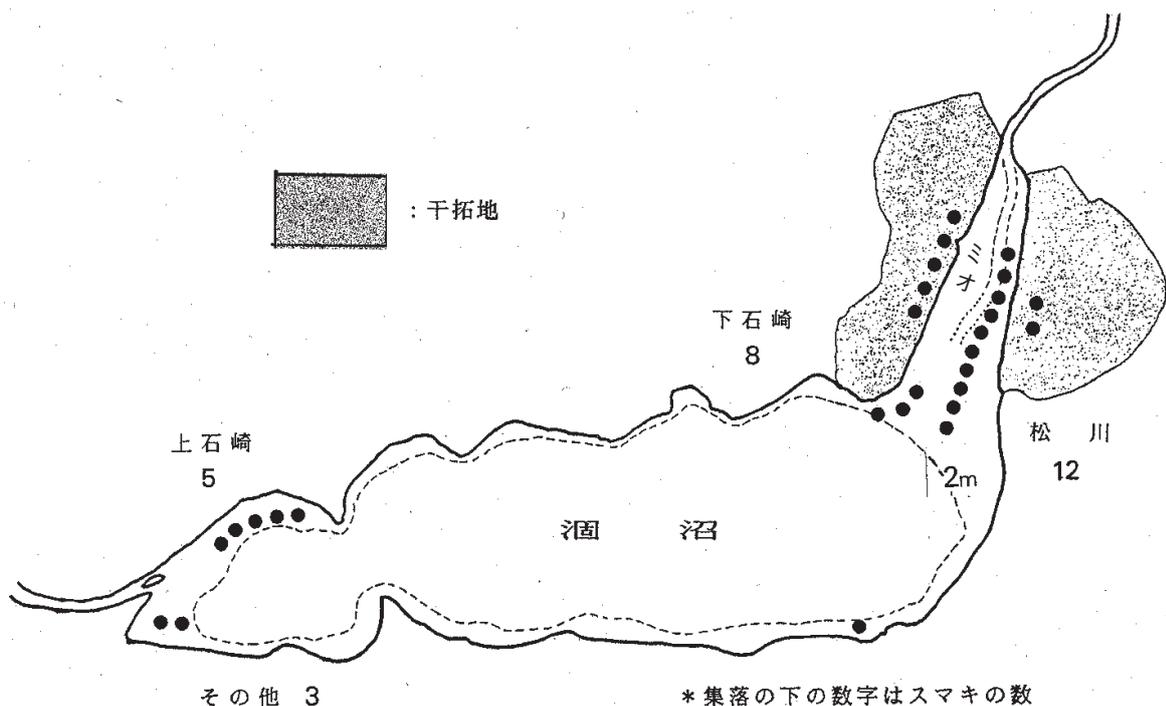


図 13 スマキが建てられた場所—昭和初期—

②漁場

涸沼では、図13に示した通り、スマキは涸沼川の流出口の付近に広がる水深2m以下のセガタ（浅堆地）に集中して見られた。現在はそうした浅堆地の多くが干拓地となっている。昭和初期、涸沼には全部で28か統のスマキがあったといわれるが、そうした浅堆地に面して立地する松川に12か統、下石崎には8か統が存在した。そのほかは、上石崎に5か所、その他3か所となっており、涸沼川の流出口となる松川と下石崎に集中して分布していたことが分かる。

この浅堆地の特徴は、他のスダテ型漁具の分布地と同様に湖底が浅く平らというだけでなく、海の干満の影響を受け、6時間おきに潮の上り下りがあることが上げられる。海の魚はその潮の流れに乗って海と湖との間を涸沼川を介して行き来する。その行きつ戻りつする魚を狙い、上りと下り両方の潮を受け止めるようにスマキは建てられる。

(3) 構造と規模

①構造

図14はスマキの型および各部位の名称について記したものである。エリやガンゴジが必ず岸辺にモトグイ（基杭）を持ち、そこを起点としてエリが形作られていたのに対して、スマキは湖面に独立して浮いているような状態で建てられる。それはちょうどエリでいえば、もっとも単純なハネコミがヨシ場の中に建てられるのと同じであるといえよう。

また、全体形としてはエリで言うところのサカサガケに相当する特殊な形をしており、2つの傘が内側を向けて結ばれる形になっている。ちょうどトオリの真中を中心点として対称形になっている。それは潮の上りと下りに対応する形になっている。これにより上りの魚と下りの魚の両方を漁獲対象とすることができる。

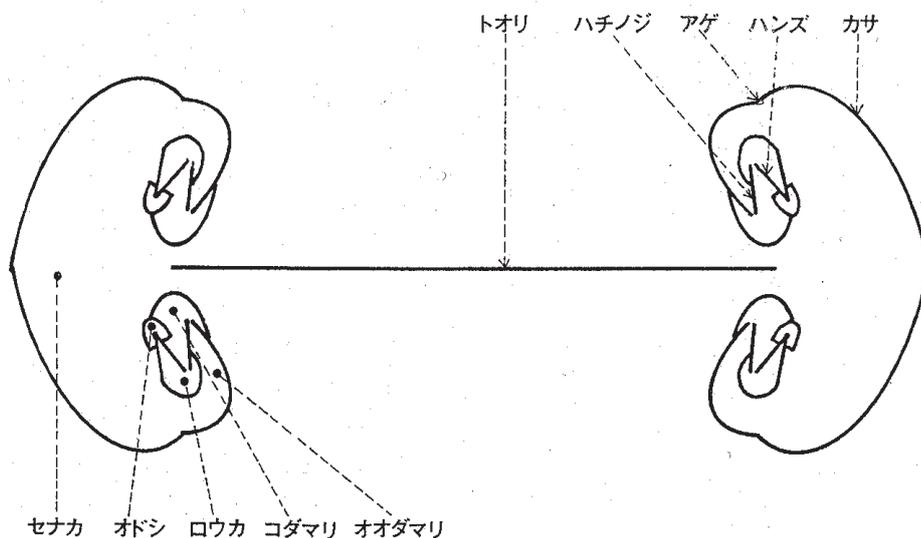


図14 スマキの型と各部位の名称

②規模

図15は涸沼でみられた最大級のスマキを示したものである。図16はそのスマキの各部位の大きさ（簀の枚数）について記している。規模という点で言うと、スマキの全長は大きなもので100間（180m）ほど、一般的には60間以下のものがほとんどであった。涸沼に見られる漁法のうちではスマキは最大規模のものである。

ちなみに、琵琶湖のエリは最大1300m、木崎湖のガンゴジは最大20mなので、規模でいうと酒沼のスマキはその中間ということになる。また、捕魚部の数でいっても、酒沼のスマキは2か所（1傘当たり）なのに対し、琵琶湖のエリは最大8か所、木崎湖のガンゴジは1か所となり、やはり両者の中間にある。

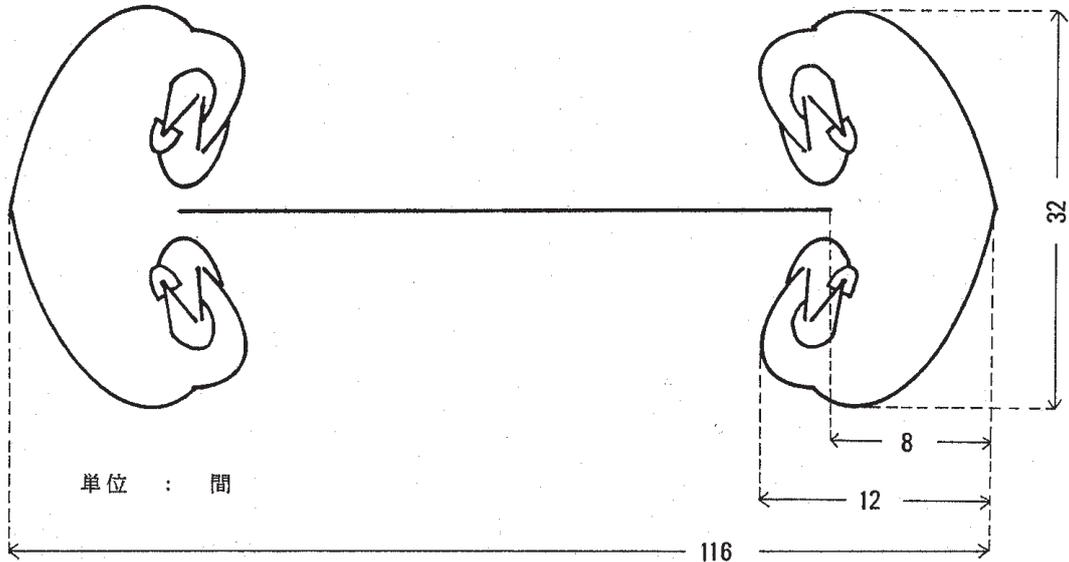


図15 スマキの規模—酒沼における最大級のもの—

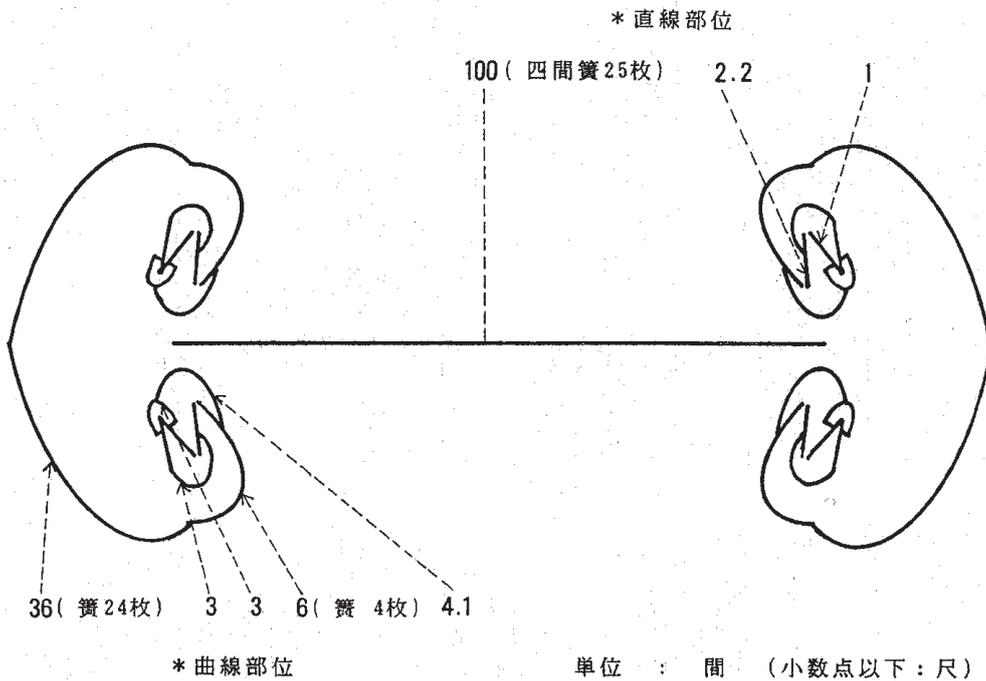


図16 スマキの各部位の大きさ

③潮の影響

スマキは酒沼の酒沼川流出口（酒沼東部地域）の浅堆地に多く分布していることは前述の通りである。それはそのあたりまでが、海の干満に応じて6時間おきに潮が上り下りを繰り返すところだからである。そうした潮の干満の影響を受けるところは「塩水半分」といわれる状態にある。そのためそこは鹹水魚と淡水魚の両方が行き来する魚の宝庫となっており、またそこで捕れる魚は美味だとして一時期「松川カレイ」のようにブラ

ンド化された産物もある。

こうした涸沼東部地域には、浅堆地の流心部に強い潮の流れる筋がある。それをミオと呼ぶ。ミオ（図13）は涸沼川の延長線上に浅堆地を突っ切るように流れており、周囲の浅堆地に比べると一段深くなっている。これがスマキにとっては大きな意味を持つてくる。

スマキは普通3～7尺(0.9～2.1m)ほどの水深の浅堆地に建てるが、より高度になると、図17にあるように、ミオの支流をうまく受け止めるように建てる。このようにミオの流れの

一部を受けることにより、より多くの漁獲が期待される。この場合、ミオの支流を受け止めるようにしてスマキの方向を決める。また、スマキ建てに長けた人になると、図17に示したとおり、スマキのカサの部分にミオに少し掛けることにより、ミオからの分流入を半ば人工的に作り出し、それをスマキに呼び込むこともできた。ただし、ミオ自体にスマキをかけることは禁止されている。また、実際は禁止されるまでもなく、ミオの流心をスマキで直接受け止めることは耐久性の点で不可能とされる。

潮の受け止め方には人により考え方が異なる。潮をトオリへ直角に当てた方がいいという人と少し斜めに当てるべきであるという人がいる。全体的には後者の意見が強い。それは潮を直角に受けると、魚がカサに入らず返ってしまう率が高くなってしまふからである。ただし、トオリに平行して流れるヨコジオはスマキが「水を抱いてしまう」（水が流れなくなる）ためよくないとするのは誰しも共通する意見である。

こうした潮の方向は、杭を打ってその潮の当り具合（杭の揺れ）で判断する。この点は琵琶湖の魎師が持つシオミ（潮見）の技術とよく似ている。ただし、エリの場合には潮の方向もさることながら潮の速さ（強さ）もエリの形や向きを決定する上で大きな意味をもっていたが、スマキに関しては潮の強さはさほど大きくない。なぜなら、スマキの場合には形はほぼ一種類に限られていて、そうした潮の強さに応じて形を変えるというようなことができないことと、強い潮の流れるミオの流心へは実質的にスマキを建てる技術がない（慣行的規則でも禁止されている）ことなどが理由として上げられよう。

もうひとつ干満の影響に関して忘れてはならないのは、涸沼の場合には6時間ごとに潮の流れる方向が変わることである。つまり、涸沼の場合、潮には上りと下りがあり、それが6時間おきに入れ替わる。そうした潮の方向転換に対応する形としてスマキの独特の形ができているとあってよい。上りのときにも下りのときにも対応できるように、左右対称でしかも両側に2か所ずつ、やはり対称形をなすように捕魚部のオドシが設けられている。

こうした形は、琵琶湖ではサカサガケなどと呼ばれる例外的なもので、極力避けなければならないものとされる。琵琶湖においても潮の流れはあるが、それは一定方向に恒常的に流れるものであるのに対して、涸沼の潮は海の干満の影響を受け6時間毎に方向転換をする。そうした違いが、涸沼では琵琶湖でいうサカサガケを一般的な形態として採用するもっとも大きな要因であるといえよう。

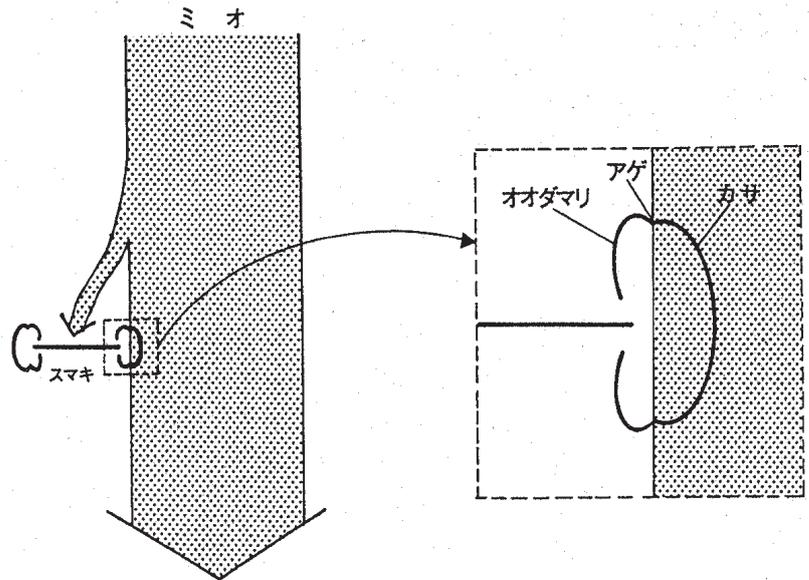


図17 スマキをミオに掛けて建てる技術—潮の呼び込み—

4. スダテ漁の起源—仮説 1—

淡水の大湖・淡水の小湖・汽水湖というタイプの異なる3か所の湖において伝承されるスダテ型漁具を比較すると、その原初的な形態および起源地について、一つの仮説を提出することができる。それは、一言でいうと、ヨシなどの水生植物が広がる湖岸の低湿地が、スダテ型漁具の起源に関わるというものである。

(1) スダテの起源地

原初的なスダテ型漁具として、たとえば琵琶湖のハネコミや木崎湖のセリコミのように、ヨシ場の中に建てられるごく小規模な漁具が想定される。それは、明確な誘導部を持たず捕魚部のみのごく単純な構造をしたものとなる。また、それは、琵琶湖の伝承や木崎湖のガンゴジで見られたように、湖岸の低湿地に自生するヨシを用いて作られるもので、その意味でも丈は低く、ヨシ場を超えて深いところにまで及ぶことはない。

湖岸に形成される低湿地は、水陸の漸移帯となるため、水面でありながら陸地でもあるという両義的性格を持っている。水位変動の激しい湖岸の場合、近代以前においては、低湿地はたとえ開田されても湿田となることが多い。そのため、そうした地域に暮らす人びとは稲作に特化した生計というよりは、稲作をおこないつつ漁撈や狩猟、採集といった生業を複合して生計を維持するような生活を営んできた。

そうした湖岸の低湿地をめぐる複合生業のひとつとしてスダテ漁は始まったと考えられる。その意味で、それはまた湖岸において生業複合度の高い生計維持戦略をとった人びとが生み出した漁法であるということもできよう。

また、低湿地の持つ陸地でありかつ水面でもあるという両義的性格は、所有の意識および利用方法にも大きな影響を与えている。スダテ型漁具の起源地として想定される湖岸の低湿地は、陸からの延長と捉えれば個人の占有意識が強くなり、また反対に水界としてみるならそこは共有空間という意識が強くなる。

琵琶湖の場合、慣行的にヨシ場のような低湿地はその地先の水田に付属するものとされた。そのため、水田の地先にあるヨシ場のヨシは水田の所有者に優先的な刈り取りの権利が認められていた。また、ヨシを簀に加工して商品とするときには、水田の所有者はより良い簀を作るために、ヨシ場に砂を入れて堅くまっすぐなヨシが生えるようにした。そのようにヨシ場への関与を強めることで、より占有の意識は強められていったと考えられる。関わりの強さが占有の意識を強めた例である。また反対に言えば、低湿地という両義的空間だからこそ、関わりの強さが占有の意識をより高めることになったといってもよからう。

(2) スダテの起源と稲作の関係

さらにいうと、ヨシ場に見られようような占有意識があるからこそ、ヨシ場は地先の水田所有者により徐々にではあるが埋め立てられ水田化されていった。琵琶湖の場合、冬場、農閑期の仕事として、水田の所有者はゴミカキジョレン（ごみ掻き鋤簾）を用いて沖側の底土を掻き取ってはヨシ地に入れ、その地を高くし苗を植えられるようにしていった。こうして湖岸のヨシ場はヨシの採集地として、また将来的には水田化が可能な地とされていた。そのように湖岸の低湿地が占有意識の高いところだからこそ、区画して一定面積を占有してしまうような定置型迷入陥穽漁具が生み出されたといえよう。

そうして、琵琶湖では稲作民の技術のひとつとして、その後スダテは展開してゆく。エリダテの技術を伝承する魎師の誕生である。なお、その場合の稲作民とは、先に述べたように、湖岸の低湿地を耕作し、かつ低湿地での漁撈や狩猟、採集といった生業も重要な生計維持の方途とした生業複合度の高い生業者である。

もちろん水田稲作がおこなわれるようになる以前からスダテ型漁具がヨシ場で用いられていた可能性は否定できない。しかし、稲作という生業がスダテ型漁具の展開にとって大きな影響を与えたことも事実である。稲作が複合生業の要素のひとつとして存在し、そのうち生計維持法として特化の傾向を示したことが、スダテ型漁具の大型化・複雑化という展開を導き出したと考えられるからである。

また、低湿地においてスダテが起源したとき、たとえその地域の生業技術の中に稲作がなくても、漁撈や狩猟、また採集を複合して生計維持法としていたことはかわりない。つまり、スダテが起源したときには稲作はあってもなくてもその地域での暮らしぶりは変わらなかったとよい。また、そうした地域において稲作がもしあったにしても、生計全体に占める稲作の地位は低く、他の生業と比較して特別に重要な位置を占めることはなかったわけで、そのときの稲作はあくまで複合生業の一つ one of them にすぎないものであったと考えられる。

こうした状態の中から、歴史的展開の中で、稲作に特化した生計維持戦略をとるものと複合生業を基礎としながらも漁撈に重点を置くもの、さらには商業経済の進展を背景に漁業に特化するものが分化していくなか、スダテ漁法をめぐってはその建造の技術は稲作民に、またその経営は漁業資本家にと受け継がれていったと考えられる。

5. スダテ漁の歴史的展開—仮説2—

スダテ漁の展開（歴史的・地域的の両面）は大きく3つのステージに分けることができる。それを示したも

表2 スダテ漁の展開—3つのステージ—

段階 項目	第1ステージ	第2ステージ	第3ステージ
漁場利用	ヨシ場など低湿地の内部 (平らで浅い水域)	ヨシ場など低湿地と湖水との接点 (浅い所から少し深くなりかけた水域)	ヨシ場など低湿地から外に出た水面 (より深い水域)
漁場環境	波や風に影響されない浅堆地 (例：琵琶湖：湖南・湖東)	波や風に一部さらされる浅堆地 (例：琵琶湖：湖南・湖東)	波や風が強い湖面 岸からすぐに深くなる場所 (例：琵琶湖：湖北・湖西)
漁期	魚類の産卵期に対応 (2ヶ月程度)	魚の産卵期に対応 (2ヶ月程度)	魚の産卵期とともに魚の周期的移動 に対応 (2ヶ月+数ヶ月)
対象魚	フナ・コイほか	フナ・コイほか	フナ・コイ・アユ・ナマズほか多数 の魚類 (淡水魚だけでなく海水魚も)
漁獲目的	漁獲量：小(相対評価) 自家消費が主	漁獲量：中 自家消費が主、一部余剰分は販売	漁獲量：大 販売が主
漁獲原理	産卵期を迎えて岸辺に寄り魚化する 魚類を捕まえる	産卵期を迎えて岸辺に寄り魚化する 魚類を捕まえる	産卵期の寄り魚とともに、潮流に 乗って行き来する魚類を捕まえる
漁者	漁者＝スダテ建造者 複合生業志向	漁者＝スダテ建造者 複合生業志向	漁者≠スダテ建造者(漁者と建造者 の分離) 漁者として建造を依頼する漁業資本 家が登場

表3 スダテ型漁具の展開—3つのステージ

段階 項目	第1ステージ	第2ステージ	第3ステージ
スダテ建造者	スダテ建造者=漁者	スダテ建造者≠漁者 スダテ建造技術に優劣	スダテ建造者≠漁者（漁者と建造者の分離） スダテ建造の専門技術者が登場
形状	単純な方形ないし円形	形状の複雑化・大型化が萌芽 （風波など自然的要因）	形状の複雑化・大型化が進展 （風波など自然的要因） （市場動向など人文的要因）
構造	捕魚部のみ（誘導部なし）	捕魚部とは独立して、誘導部が設置	捕魚部と誘導部が完全に分離 捕魚部の複数化 誘導部の複雑化・長大化
規模 （相対評価）	小 （数m）	小～中 （数m～数十m）	中～大 （数十m～数百m、ときに千m超）
建造技術 （相対評価）	簡単（非専門性）	難易度の上昇 一部に専門技術化	難易度の著しい上昇 設置のための専門技術者の必要性
型	1種のみ	基本は1種、ときには2種類	型の多様化
段	1段	1段、ときに2段	1から6段ほどまで （適地であり、社会的要因が許せばそれ以上）
捕魚部 （1段あたり）	1ヶ所	1ヶ所、ときに2ヶ所	2, 4, 6, 8ヶ所
材料	ヨシ （建造地で入手可能な素材）	ヨシ、タケ （建造地で入手可能な素材）	タケ、後にプラスチック・網 （産地・製造地より購入）
応用性 （相対評価）	小	中：新たな環境への適応の可能性	大：新たな環境への適応が拡大

のが、表2と表3である。以下、表に沿ってスダテ漁法の展開過程について仮説を提示する。

（1）ヨシ場内の漁—第1ステージ

第1ステージは、スダテがヨシ場など水辺の低湿地の内部に止まっている段階である。スダテ型漁具はヨシ場内にあるため、小型で単純な形状にしか作ることができない。具体的には、琵琶湖のエリの中でもっとも原初的と考えられるハネコミと木崎湖のガンゴジの中のセリコミが相当する。

①スダテ漁について

【漁場利用】湖沼の沿岸に広がるヨシ場など水生植物の繁茂する低湿地が漁場として用いられる。接続する陸地に水田がある場合には、そうした低湿地は地先の水田に付属されるものと意識されることも多く、開田されたり、また漁場として用いられるときも、半ば占有的な意識が形成されることが多い。

【漁場環境】定置性のスダテ型漁具にとっては制限条件となる波や風の影響を受けづらいヨシ場内の浅堆地において建てられる。

【漁期】5月から6月の産卵期が主な漁期となる。

【対象魚】フナ・コイが主となるが、同時期に産卵期を迎える魚はすべて漁獲対象となりえる。

【漁獲目的】漁期に限られまた漁獲量は少ないため、自家消費の目的が強い。

【漁獲原理】産卵期を迎えて岸辺のヨシ場や低湿田といった低湿地に寄り魚化する魚類を捕獲する。そのため漁具の形状や仕掛け方は、沖から岸へという魚の動きに対応する。

【漁者】 漁者はスダテ型漁具を設置する人自身。稲作を含む複数の生業をおこなう複合生業志向を有する。

②スダテ型漁具について

【建造者】 漁者が自らスダテを建造する。

【形状】 ヨシ場内に作るため、小規模かつ単純な方形または円形とならざるをえない。

【構造】 スダテ型漁具としては、補魚部のみで明確な形で誘導部をもたない。構造として、誘導部と捕魚部の分離はみられない。

【規模】 小規模（第2・3ステージとの相対評価）

【建造技術】 単純で専門技術を必要としない。複合生業の一技術にすぎない。

【型】 1種のみ。スダテ本体は捕魚部だけでできており、明確には誘導部を持たない。産卵期を迎え活発化した魚が捕魚部に直接入ってしまう。第2・3ステージで見られるような、いわゆる左右対称となる傘の形状をなさない。

【段】 1段。

【捕魚部】 1段あたり1ヶ所。

【材料】 スダテの主たる材料には現地（ヨシ場）で採取されるヨシが用いられる。

【応用性】 新たな環境への適応度は低い。ヨシ場内でしか使えない。

(2) ヨシ場と湖面の境界における漁—第2ステージ

第2ステージは、スダテの傘の部分だけがヨシ場から湖面に顔を出した状態となる。スダテ型漁具としては、わずかではあるが大型化・複雑化の兆しが見られる。具体的には、木崎湖のガンゴジ（セリコミを除く）が相当する。第2ステージに至り、スダテ型漁具は開いた傘の形をとるようになる。

①スダテ漁について

【漁場利用】 湖岸に広がるヨシ場とその先の水面とのちょうど接点が漁場として用いられる。ヨシ場内には誘導部が残り、湖面との接点に補魚部が設置される。それは水田所有者による占有の意識が強いヨシ場と共有意識の下にある湖面との接点でもある。

【漁場環境】 補魚部がヨシ場から出ること、ヨシや水生植物といった障害を避け、スダテ漁具の複雑化・大型化の足がかりを得る。反対に、スダテの本体はまだヨシ場内に残っているため、波や風の影響を受けることは少ない。

【漁期】 5月から6月の産卵期が主な漁期となる。

【対象魚】 フナ・コイが主となるが、同時期に産卵期を迎える魚は漁獲対象となる。

【漁獲目的】 自家消費を主とするが、余剰分は販売されることもある。

【漁獲原理】 産卵期を迎えて岸辺のヨシ場や低湿田といった低湿地に寄り魚化する魚類を捕獲する。そのとき寄り魚が障害物にあたって岸から沖へと逃げようとするとき、その魚を効率よくスダテの中に呼び込めるように工夫されている。これによりスダテ型漁具の特徴的形狀である傘の開いた形をとるようになり、第1ステージのスダテよりもはるかに効率よく捕魚できるようになった。

【漁者】 漁者はスダテ型漁具を設置する人自身。稲作を含む複数の生業をおこなう複合生業志向を有する。

②スダテ型漁具について

【建造者】漁者が自らスダテを建造する。ただし、一部にスダテ設置における専門技術化がみられるようになり、スダテの建造において技術の優劣が明瞭となる。

【形状】スダテの一部ではあるが、ヨシ場内から脱することで水生植物に邪魔されることがなくなり、形状の複雑化と大型化が可能となる。また、補魚部がヨシ場から湖面に出たことで、風や波の影響を直接受けることになり、それを避けるために傘のような弧を描く形状が採用される。

【構造】漁具の構造として、魚を誘い込むための誘導部が捕魚部とは独立して設けられるようになる。ヨシ場と湖面との接点はカケアガリなどと呼んで湖底が急に深くなっていることが多いが、それは魚をスダテ内部の捕魚部へと呼び込むときに重要な意味を持っているとされる。したがって、そうしたカケアガリにうまくスダテ型漁具を掛けて作ることが建造者の技術として求められるようになる。

【規模】中規模（第1・3ステージとの相対評価）。

【建造技術】湖底の状況に応じた簀の立て方など一部に専門技術化が見られ、建造の難易度は上がる。

【型】1種のみ。ただし第1ステージのスダテとは異なり、スダテ本体は捕魚部と誘導部とで構成されるようになる。そして、スダテの全体形は、いわゆる傘を沖に突きだしたような形になる。これにより、岸から沖に逃げる魚類を効率よくスダテ内に誘導できるようになるとともに、風や波への耐性も高くなる。

【段】1段。

【捕魚部】1段あたり1ないし2ヶ所の捕魚部を有する。傘のような形になったものは傘の両側に同型の捕魚部が設置可能となる。これにより、第1ステージに比べると、スダテ漁における漁獲効率は大きく向上した。

【材料】スダテの主たる材料には現地で採取することのできるヨシやタケが用いられる。タケはスダテがヨシ場の中から湖面に出て行こうとするとき、その耐久性を増すためになくはならなかった。

【応用性】風や波への耐性が高まることで、新たな環境への適応度は高くなる。

(3) 湖面での漁—第3ステージ

第3ステージの特徴は、ヨシ場に誘導部の一部を残すものの、スダテ型漁具の本体はヨシ場を離れ湖上に設置されることにある。スダテ型漁具は、ヨシ場から出ることによって大型化・複雑化がいっそう進み、その漁獲量も格段に向上する。具体的には、琵琶湖のエリ（ハネコミを除く）と潤沼のスマキが相当する。

①スダテ漁について

【漁場利用】湖岸のヨシ場近くからその先に広がる湖面まで広く漁場として用いられるようになる。

【漁場環境】ヨシ場から出ることによって湖面上にスダテ型漁具の本体がさらされる。よって波や風の影響を強く受けることになる。そのため、カケアガリの湖底地形を見つけ出しスダテの入口部分に掛けて建造する技術（第2ステージで獲得した技術）とともに、湖流や風・波の圧力を避けるためのスダテ技術が必要となった。さらに、沖に出るほど水深が増すため、そうした水深への対応にも迫られることになり、杭や簀において竹材に代わって丈の制限がないプラスチックのような新素材の使用が加速される。

【漁期】漁期は5月から6月の産卵期に加え、長期化する。それは、湖の中の潮の流れ（湖流）に乗って行き来する魚類も漁獲対象とすることができるようになったからである。そのため、地域によっては、一年を通してスダテ型漁具を設置することが可能となった。

【対象魚】5・6月に産卵期を迎えるフナやコイといった魚の外にも、アユなどさまざまな魚種をスダテの対象

魚にすることができるようになった。また、第1・2ステージではコイやフナも産卵期をむかえ寄り魚化したものだけしか捕ることができなかったが、他の季節にも漁は可能になった。このことにより、魚の食べ方や料理法も多様化できた⁽²⁾(安室,1992)。

【漁獲目的】 長期に渡り大量の漁獲物が期待される。そしてそれは販売が主目的になる。そのため対象魚種は市場の需要(消費者のニーズや文化的な志向性)を如実に反映したものとなる。第1・2ステージまでは自家消費されることが多かった漁獲物ではあるが、第3ステージに至るとスダテの漁獲物は商品となって流通することになる。

【漁獲原理】 産卵期を迎えて岸辺のヨシ場や低湿田といった低湿地に寄り魚化する魚類を捕獲するとともに、潮の流れに乗って沖を行き来する魚類を捕獲することができるようになった。漁期の延長とともに、むしろ産卵期よりも潮の流れとともに行き来する魚類を捕獲のためのものへと漁獲原理は変化していった。

【漁者】 小型のものであればスダテを設置する人自身が漁者になることはあるが、大型のスダテになると設置するための経費がかさむため、スダテを経営するのは漁業者ではなく為政者側にある者または漁業資本家に変化していった。その場合、ときに建造のための技術だけが、第1ステージにおいてヨシ場内でスダテをおこなっていた複合生業度の高い稲作農民の側に残されるという現象も見られる。歴史的にもっとも高度にスダテ型漁法が展開した琵琶湖では、エリの建造を請け負う稲作農民(トウリョウなど魎師)とエリの経営者として建造を依頼する漁業資本家(オヤカタ)という分業化が図られるようになった。さらにいうと、毎朝のエリカキ(エリの捕魚部から魚を掬い取り水揚げする仕事)は零細な漁業者が請け負うことも多く見られた。この場合は、エリをめぐるのは、漁業資本家、稲作農民、零細漁民の三者による役割分担がなされたことになる。

②スダテ型漁具について

【建造者】 大型のスダテ型漁具の設置は専門家に任されるようになる。琵琶湖の魎師(トウリョウ)がその典型である。また、その建造には莫大な経費がかかるため、スダテを建造するものと経営をおこなうもの(出資者)とが分離する。その場合、経営は漁業資本家が担うようになる。

【形状】 広大な湖上にスダテ本体が進出することで、ヨシなどの水生植物に邪魔されることなく自由な造形が可能になる。その結果、形状の複雑化・大型化が一気に進む。ただし、それはいくつかの制限要因を解除すること(促進要因に対応すること)で初めて可能となる。そうした制限要因(促進要因)には、第2ステージで明らかとなった風など自然的なものだけでなく、第3ステージではとくに人文的なものが大きな意味を持つ。自然的要因としては、スダテ型漁具の本体がヨシ場を離れて完全に湖面に出ることで顕在化する風や波の影響について、極力それを受けづらい形状がさまざまに採用される。また、より深い沖に進出することで、強い潮の流れを受けようになり、そうした潮流に対する耐久性についても形状による対応がなされる。人文的要因としては、市場経済への対応があげられる。具体的には、漁獲物が販売対象とされることで市場の動向がスダテの形状変化を促す大きな要因となっている。一例を挙げれば、琵琶湖では、全国的な動向として放流用稚アユの需要が増すとそれに対応してエリも稚アユ専用のもの(ズットイキ)が多く建てられるようになる。こうした自然的・人文的ふたつの要因により、結果として、スダテ型漁具の形状はさまざまに分化し全体として多様化することになる。

【構造】 スダテ型漁具において、補魚部と誘導部が完全に分離するとともに、補魚部の複数化と誘導部(誘導路)の複雑化(長大化)がなされる。1漁具あたり補魚部の数は最大8つのものまであり、そうした補魚部により多くの魚を誘い込むため複数の誘導部(誘導路)を持つ複雑な構造をしたスダテ型漁具が登場する。スダテ型

漁具の大型化は基本的には補魚部の複数化と誘導部（誘導路）の多数化（長大化）によるところが大きい。

【規模】大規模（第1・2ステージとの相対評価）。水深など自然的制約とともに社会的制約のもとでその地域のスタテは最大規模が決まってくる。さらには大型のスタテを建造するには多額の経費が必要となるため、設置者（出資者）の経済状況も規模の決定には大きな要因となる。

【建造技術】スタテを建てるには、湖底の変化や潮の流れなどさまざまな環境条件に対応し、かつ風や波といったスタテを規制する制限要因を取り除く必要がある。そのため、スタテの建造は専門技術化が一気に進むことになる。スタテ建造の難易度が著しく上がり、琵琶湖の魎師のような専門技術者が生み出される。

【型】補魚部の数や位置、魚が方向転換する回数、補魚部に至るまでの誘導部の数など、スタテ型漁具の型を決定する要素が複数存在する。そうした漁具としての複雑度を指標として型が分化してゆく。その結果、琵琶湖のように型が数十に及ぶところまででくる。

【段】1段から6段を超えるものまで多様なものがある。浅堆地が続くところなら技術的には6段を超えて何段でも建造は可能であるとされる。しかし、そうならないのは、スタテ漁法の場合、段を増やせば増やすほど社会的制限が強くなるためである。段が増えスタテが長大化すれば、それだけ湖面を仕切る長さは増すため、水運業者や他のスタテ設置者、また対岸の村落との間で争論が持ち上がる率は高くなる。そのため、社会的規制が働き、例えば琵琶湖では歴史的に見て沖に伸びるスタテ型漁具の段数は6段適度にとどまっている。

【捕魚部】1段あたり最大8ヶ所まで捕魚部を有するようになる。その場合、2, 4, 6, 8個というように捕魚部は増えてゆく。そのように偶数個が基本とされるのは、スタテが傘のように左右対称形をなすためである。基本的に補魚部の数が増えるのに比例してスタテの構造は複雑さを増し、スタテ建造の技術は高度化・専門化する。

【材料】タケが用いられる。ヨシ場から湖面に展開したスタテには、風や波の影響を受けかつ水深が増すことから、ヨシよりも耐久性がありまた丈の高いタケが不可欠となる。第2ステージまではタケはスタテ地で自給されることが多かったが、第3ステージになると高品質でより丈の高いタケを相当量入手する必要があるため、タケは産地から取り寄せられることが多くなる。つまりタケは購入品となる。さらにいうと、後にはプラスチックを素材にした簀に転換してゆく。

【応用性】新たな水域環境への適応度は高い。例えば、涸沼のように海域や汽水域でも用いられ、さらには潮の干満といった環境条件を漁にうまく利用することも考案される。

6. さまざまな環境への適用—仮説3—

第3ステージに到達することで、スタテ漁法はさまざまな環境への適用が可能となる。一つは、本来はスタテ漁法には不向きなところへの拡大である。具体的には、琵琶湖のスタテ型漁具のなかでもとくに湖北と湖西に建てられたエリが相当する。そしてもう一つは、汽水域へのスタテ漁法の適用である。具体的には、涸沼のスマキが相当する。

(1) 不適地への導入

大きな流れとしては、スタテ漁はステージが進むに従い、産卵期を迎えて湖岸に寄り魚化する魚を捕らえるものから、潮の流れに乗って行き来する魚を捕るためのものへと漁獲原理を転換した。ただし、そうした漁獲原理の転換は、新旧のトレード・オフではなく、旧来のものに新しいものが付加されるかたちでなされたこと

に特徴がある。その意味でスダテ漁は新たに漁獲原理を増強したといえる。

そのためにスダテ型漁具はまずヨシ場の中では考慮する必要がほとんどなかった風や波といった制限条件を解除していった。そして、次の段階として、より深い場所へと適用地を拡大してゆく。より深い場所は風波と同時に強い湖流のあたるところでもあるため、深さを克服するとともに潮の流れに対する耐性も必要となる。

琵琶湖でいえば、エリ漁は第1・2ステージまでは浅堆地が広がる湖南や湖東が中心地であったが、第3ステージに至り、ヨシ場が狭く、かつ岸からすぐに深くなるような環境条件にある湖西や湖北にも拡大してゆくことになった。

その時に重要な役割を果たすのが、トウリョウなど魴師と呼ばれるエリ建造のための専門技術者であり、その多くは木浜のような湖南や湖東の稲作農家であった。彼等が暮らす湖南や湖東において第1から第2、第3ステージへと展開する中で蓄積していった高度な技術と知識が有ったからこそ、湖北や湖西でのエリダテが可能になったといえよう。

こうして、琵琶湖全体でいえば、ヨシ場が発達し、かつその先に浅堆地が広がるような地域でのエリダテから、岸から急に深くなるような地域でのエリダテまで、総体ではじつに多様で高度なエリダテの技術を保持することになった。そうした技術力があつたからこそ、後に琵琶湖漁師が霞ヶ浦（茨城県）や東郷池（鳥取県）といったところへ積極的にエリを導入してゆくことが可能になったといえよう。

ただし、そうしたエリダテの技術は琵琶湖以外の地でも自然環境上の問題を克服し、漁獲という面では十分にエリ漁を成功させたが、結局のところ魚の仲卸や地元漁師との関係など社会環境上の問題から撤退せざるをえなくなってしまった（安室、1988）。第3ステージに至り、大型化したエリは、前述のごとく、商業経済の問題を無視することはできず、それは自然環境以上に社会環境上の問題が規制要因として強く作用するようになったことを示している。

（2）汽水域への導入

第3ステージに到達することで強い潮の流れに対する耐性を手に入れると、より効率よく魚を捕ることが可能な場へスダテ漁法は応用されるようになる。そうした場の一つが汽水域である。洄沼を例にして示したように、海の干満は6時間おきに潮の行き来をもたらす。そうした定期的な潮の動きを利用するためのスダテ型漁具が考案されてくる。

洄沼のスダテ型漁具は、他の地域で見られるような形、つまり岸の元杭から沖へと柄を延ばした形では建っていない。スマキは図14に示したように、いわば湖中に独立した形で建てられる。このように元杭に拘束されることなくスマキは自由に適地を選ぶことができ、かつより自由な造形が可能となる。

そのため、スマキでは傘の曲面部分は沖に向けるだけでなく、岸側にも向けられる。これは琵琶湖ではサカサガケと違って誤りとされる設置方法である。さらにいうと、スマキの場合、正常な向きに開いた傘の向きと琵琶湖では異常とされる向きの傘とが組み合わされて一組になっている。つまり2段（1対）で1つのスマキを形成している。

それは潮流との関係で説明できる。琵琶湖の場合には、潮の流れつまり湖流は時計回りまたは反時計回り（地域によって異なる）に一年中一定しているのに対して、洄沼では海の干満の影響を受けて流入する潮は方向を6時間毎に逆転させる。つまり、琵琶湖では誤りとされるスマキの設置方法は、6時間毎に逆転する潮の流れを有効に漁獲活動に結びつけるための工夫であるといえる。スマキでは湖中に独立した形で、2つの傘が内側を見せ合う形（つまり2つの傘が反対方向に突きだした形）に建てること、上り潮の時も下り潮の時にも漁

獲が可能となる。

さらにいうと、涸沼内における6時間おきの潮の逆転は、潮の干満によりもたらされるもので、いわば一年中繰り返されることである。そのため、ほぼ一年を通してスマキでは漁ができることになる。

また、スマキにはコイやフナといった淡水系の魚類だけでなく、クロダイやニシン、カレイといった海水魚も多く入る。淡水と鹹水の区別なく多様な魚類を捕ることができるのは、こうした汽水域にスダテ型漁具が開発していったもっとも大きなメリットのひとつであるといえる。

【注】

- (1) 定置型迷入陥穽漁具についてスダテの名称を用いる地域は、伊豆沼・長沼（宮城県）、猪苗代湖（福島県）、福島潟（新潟県）、霞ヶ浦（茨城県）、手賀沼（千葉県）、東京湾（千葉県）など、東日本に広く分布していることが分かる。
- (2) 琵琶湖では、フナズシのための抱卵したフナには、ヨシ場にやってきたものはすでに産卵直前か直後となっているため使うことはできない。第3ステージに至り、沖捕りが可能となることで抱卵したフナをフナズシの材料として用いることができるようになった。抱卵したフナズシが珍重されるようになったのはエリの沖への延伸が可能となった第3ステージ以降であるといえる。

【引用参考文献】

- ・滋賀県 1973 『びわ湖の自然』 滋賀県
- ・滋賀県教育委員会 1981 『内湖と河川の漁法－琵琶湖総合開発地域民俗文化財特別調査報告書Ⅲ－』 滋賀県教育委員会
- ・日本学士院 1982 『明治前日本漁業技術史（新訂版）』 井上書店・臨川書店
- ・安室 知 1988 「生活者の目－ある漁師の環境観から－」 『民具マンスリー』 21巻5号、神奈川大学日本常民文化研究所
- ・安室 知 1989 「エリをめぐる民俗①－琵琶湖のエリ〈前編〉－」 『横須賀市博物館研究報告（人文科学）』 34号、横須賀市自然・人文博物館
- ・安室 知 1990 「エリをめぐる民俗①－琵琶湖のエリ〈後編〉－」 『横須賀市博物館研究報告（人文科学）』 35号、横須賀市自然・人文博物館
- ・安室 知 1991 「エリをめぐる民俗②－涸沼のスマキ－」 『横須賀市博物館研究報告（人文科学）』 36号、横須賀市自然・人文博物館
- ・安室 知 1992 「稲作民の淡水魚食－保存技術と漁撈技術とのかかわりから－」 『信濃』 44巻8号、信濃史学会
- ・安室 知 1993 「エリをめぐる民俗③－木崎湖のガンゴジ－〈前編〉－」 『横須賀市博物館研究報告（人文科学）』 38号、横須賀市自然・人文博物館
- ・安室 知 1994 「エリをめぐる民俗③－木崎湖のガンゴジ－〈後編〉－」 『横須賀市博物館研究報告（人文科学）』 39号、横須賀市自然・人文博物館